

鬼虎川遺跡調査概要 I

1980

東大阪市遺跡保護調査会

鬼虎川遺跡調査概要 I

1980

東大阪市遺跡保護調査会

はしがき

東大阪市内には、今まで120カ所以上の埋蔵文化財包蔵地があり、本書に収載した鬼虎川遺跡もその一つであります。これらの包蔵地の大部分は、毎年繰り返される発掘調査にもかかわらず、いまだ規模・性格など不明確な点が多く問題を残しております。鬼虎川遺跡も、今回の調査以前ではその重要性には注目されていながら、性格、範囲などは全く不明であります。3カ年にわたる発掘調査の結果、弥生時代の農耕集落の様相、遺跡の規模などが次々とあきらかになってきました。これらの成果を一刻でも早く報告し、遺跡の重要性を高める必要から、整理の半ではありますが調査結果をまとめた次第であります。いずれ、整理が終了した段階で出土遺物などを含めた報告書を刊行する予定であります。

本書が鬼虎川遺跡の理解を高め、市民の皆様への文化財の御理解に役立つものとなれば幸甚に存じます。

最後に、長期間調査の実施に御協力をいただいた大阪府水道建設部、ならびに調査の実施から報告書の作成までご尽力をいただいた大阪市立自然史博物館の皆様方に感謝の意を表します。

東大阪市遺跡保護調査会

理事長 秀平勇造

例　　言

1. 本書は、大阪府水道建設部が昭和51年から昭和54年までおこなった水道管布設工事に伴って発掘調査を実施した鬼虎川遺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて、大阪府水道建設部から東大阪市遺跡保護調査会への委託事業として計画し、第4次調査・第5次調査は、東大阪市教育委員会文化財課下村晴文、東大阪市遺跡保護調査会才原金弘を担当者として昭和51年3月25日～5月26日まで第4次調査、昭和52年8月10日～昭和53年5月31日まで第5次調査を実施した。第6次調査は、才原金弘を担当者として昭和54年2月19日～昭和54年3月28日まで実施した。その後、東大阪市遺跡保護調査会の担当で整理作業を進めているが、今回は発掘調査で検出した遺構を中心とした概要報告書であり、遺物を含めた総括は本報告書刊行の予定である。なお、自然史関係の調査は那須孝悌（大阪市立自然史博物館）を代表とする自然史調査会を編成して実施した。
3. 本書は下記の者が分担執筆した。

第1章……………下村晴文
第2章……………才原金弘、樽野博幸
第3章-1)……………那須孝悌、樽野博幸、下村晴文、才原金弘
2)……………下村晴文
3)、4)……………才原金弘
5) -(1)……………樽野博幸
5) -(2)……………日浦勇
5) -(3)、(4)……………那須孝悌
第4章……………執筆者全員

4. 本書に掲載した遺構の実測図は、調査担当者が作成したが青野正彦、松田順一郎、畠本政美の助力があった。遺物の実測・製図は才原がおこない、原稿の整理等については矢野記世子、梅本敦子、大野佳子が行なった。
5. 整理作業中、淡水貝類の鑑定には梶山彦太郎氏の助言を得た。また、火山灰の分析は大阪市立大学の吉川周作氏に依頼した。これらの関係諸氏に深く感謝の意を表する。

調査は、上記の執筆者以外に下記の方々に参加していただいた。

青野正彦　飯塚典正　石田和俊　稲垣義一　上野聖二　梅本敦子　裏野雅一
浦元英俊　大野佳子　落合信生　小梅　聖　佐野可和　高石俊哉　田村公子
辻　徹　土井英清　中嶋和彦　中島　仁　中澄幸彦　畠本政美　藤井哲司
藤本　隆　古元秀雄　本田圭子　松田順一郎　武藤一夫　森田英俊　安井誠司
矢野記世子　山本克之　横山卓夫　藤坂喜代志

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 位置と環境.....	2
第3章 調査の概要.....	4
1) 基本層序.....	4
2) 第4次調査の概要.....	9
3) 第5次調査の概要.....	19
4) 第6次調査の概要.....	28
5) 自然遺物.....	30
(1) 動物遺体.....	30
(2) 昆虫遺体.....	32
(3) 植物遺体.....	37
(4) 花 粉.....	41
第4章 まとめ.....	42
1) 造構について.....	42
2) 鬼虎川遺跡の範囲.....	42
3) 自然環境.....	43
4) 当時の生活.....	44
5) 縄文時代以前の環境.....	44

挿図目次

第1図 遺跡周辺図.....	3
第2図 各次調査地域の地区割図.....	4
第3図 遺跡地の基本層序.....	5
第4図 地質断面図.....	7
第5図 第4次調査地断面図.....	10
第6図 4D・E・F地区平面図.....	11
第7図 溝1内出土遺物.....	12

第8図	落ち込み1、ピット3、ピット8内出土遺物	12
第9図	井戸1内出土遺物	13
第10図	溝2内出土遺物	13
第11図	4B・C地区平面図	16
第12図	4A地区遺物出土状況	17
第13図	4A地区平面図	18
第14図	溝3内出土遺物	18
第15図	第5次調査地断面図	20
第16図	5A・B地区平面図	21
第17図	5B地区杭列3	22
第18図	5D・E地区杭群4	24
第19図	5H地区杭列5	25
第20図	5D～F地区平面図	26
第21図	5G・H地区平面図	26
第22図	5I・J地区杭群6、落ち込み1・2	折り込み
第23図	出土遺物	27
第24図	第6次調査地断面図	28
第25図	ボーリング位置及び調査位置図	29
第26図	オオオサムシの分布図	35
第27図	第5次調査地出土昆虫遺体図	35

表

第1表	4E・F地区ピット計測表	15
第2表	第4次調査地出土動物遺体	31
第3表	第5次調査地出土動物遺体	32
第4表	第4次調査地出土貝類遺体	33
第5表	第5次調査地出土貝類遺体	33
第6表	第5次調査地出土昆虫遺体	34
第7表	第4次調査地出土植物遺体	38
第8表	第5次調査地出土植物遺体	39

図版目次

- 図版1 遺跡 1 鬼虎川遺跡周辺
2 第4次調査地近景
- 図版2 4D・E地区 1 溝2
2 井戸1
- 図版3 4F地区 1 杭群1
2 杭群1
- 図版4 4A地区 1 杭群2
2 遺物出土状況
3 遺物出土状況
- 図版5 4A地区 1 杭群2
2 杭群2
- 図版6 4B地区 1 ピット15
2 ピット14
- 図版7 4A地区 1 須恵器・土師器出土状況
2 弥生土器出土状況
- 図版8 4B・D地区 1 4B地区丸鍬出土状況
2 4D地区鋤出土状況
- 図版9 4B・C地区 1 4B地区鍬出土状況
2 4C地区動物遺体出土状況
- 図版10 遺跡 1 第5次調査地近景
2 5B地区東壁断面
- 図版11 5D・H地区 1 5D地区東壁断面
2 5H地区東壁断面
- 図版12 5B地区 1 溝4 東から
2 溝4・6
- 図版13 5A・D地区 1 ピット17
2 ピット18

- 図版14 5 B 地区 1 杭列 3
2 杭列 3
- 図版15 5 D・E 地区 1 杭群 4 西から
2 杭群 4 東から
- 図版16 5 H 地区 1 杭列 5 東から
2 杭列 5 東から
- 図版17 5 I・J 地区 1 杭群 6 西から
2 杭群 6 西から
- 図版18 5 A～H 地区 1 5 A～H 地区 西から
2 5 A～H 地区 西から
- 図版19 5 A・B 地区 1 5 A 地区 狹斎出土状況
2 5 B 地区 積木出土状況
- 図版20 5 C 地区 1 5 C 地区 脱輪出土状況
2 5 C 地区 弥生土器出土状況
- 図版21 遺跡 1 第6次調査地近景
2 6 B 地区 西壁断面
- 図版22 6 A・B 地区 1 6 A 地区 東から
2 6 B 地区 東から
- 図版23 自然遺物 1 動物遺体

第1章 調査に至る経過

鬼虎川遺跡は、弥生時代の遺物包覆地として東大阪市遺跡台帳に記された周知の遺跡であったが、性格・規模など詳細はわからなかった。遺跡の発見は、昭和38年に遡る。当時、国道180号線（大阪外環状線）の建設工事に関連して、大阪府の水道管施設工事がおこなわれた。その際に掘り上げられた土砂の中に大量の弥生土器とともに木棺の底板が1中学生によって採取されて、注目されるようになった。鬼虎川遺跡の名は、當時畿内では数少ない木棺の出土地として有名になったが、その後は調査もおこなわれず、不明のままであったが、昭和50年に大阪瓦斯株式会社が、国道180号線と308号線（篠港一枚岡線）との交差点内で瓦斯管埋設工事を計画し、工事に先立つ発掘調査を東大阪市遺跡保護調査会が実施し、弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。この3ヶ所の調査地点を北より第1次・2次・3次調査地と呼ぶことにした。これらの調査は、鬼虎川遺跡に隣接する最初のものであるが、面積的には85m²と小規模な範囲にとどまった。しかしながら、遺跡が地表下約5mまで埋没していること、包含層の堆積が0.5~1m以上の厚さで認められ且つ、粘土層内での密閉状態にあるために遺物の保存状態が非常に良好なことなど新しい知見が得られた。この結果から、遺跡は国道180号線より東へ広がると予想された。

昭和51年2月に大阪府水道部建設事務所が東大阪市弥生町1370番地（国道180号線より西側部分）で水道管施設工事を計画し、一部で工事を実施しているとの連絡があった。工事区間は、従来の鬼虎川遺跡の範囲外であったが、隣接地でもあることから、昭和51年3月15日に東大阪市教育委員会文化財課で試掘調査を実施した。その結果、明確な遺物包含層を検出した。その後、大阪府と東大阪市教育委員会との間で再度協議がおこなわれ、工事を一時中止し、すでに工事カ所全面に基礎杭が打ち込まれているが、掘削が完了していない部分270m²について昭和51年度事業として第4次の発掘調査を実施することになった。また、本水道工事は、3年継続で西へ延長する計画であり、第4次調査の結果、遺跡がさらに西へ続くことが確認できたため、延長の工事区画も、年度別に第5次、第6次調査として引き続き発掘調査を実施することになった。調査は東大阪市教育委員会の依頼を受けて、東大阪市遺跡保護調査会が大阪府水道部建設事務所と委託契約を交わし、実施することになった。

第4次調査は昭和51年3月25日～5月26日まで、第5次調査は昭和52年8月10日～昭和53年5月31日まで、第6次調査は54年2月19日～54年3月28日までそれぞれ実施した。



第4次調査風景

第2章 位置と環境

当遺跡は、現在の行政区画では大阪府東大阪市弥生町から水走一帯に位置する。遺跡の東には生駒山地がせまり、一方西には河内平野が広がる。生駒山地西麓には各谷筋から流れ出た土砂が堆積し、いわゆる複合扇状地を形成している。河内平野は、旧大和川によって形成された沖積平野である。旧大和川は現在の恵留川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川の大小5本からなっているが、遺跡の西には玉串川から分流する旧吉田川によって形成された自然堤防がみられる。当遺跡は、この自然堤防と生駒山地西麓に形成された扇状地間に位置する。^{注1} この一帯では、低湿地の水はけを良くし、水田に適した土壤とするために「堀り上げ田」^{注2} が見られる。これは、水田の両側に細長く池を堀り、水溢りとするものである。この様に当遺跡の周辺は、現在でも水の排除に大きな努力を払っているような土地である。

縄文時代の遺跡は扇状地に出現した。当時は、河内湾を前面にひかえ最も生活に適した場であったと思われる。たとえば日下貝塚・繩手・馬場川遺跡などがある。これらは、少しづつ時期を異にして縄文時代中期末～晚期初頭まで及んでいる。弥生時代には、より低地に進出するとともに生駒山地の尾根上から山腹にも出現する。中期～後期には尾根上の遺跡として、例えば標高60～100mの山畠遺跡、標高80m前後の岩滝山遺跡などがある。扇状地に立地する遺跡は、縄文時代より続く繩手・馬場川遺跡のほか、北より中垣内・芝ヶ丘・西ノ辻・鬼塚・皿池遺跡などがある。これらは、旧東高野街道ぞいに点々と分布する。鬼塚遺跡は縄文時代晩期末と弥生時代前期の土器が共伴し著名となった遺跡である。また西ノ辻遺跡は、当遺跡より若干遅く中期に開始され、特に後期初頭の標高遺跡として知られている。この付近の扇状地の標高は30m（扇頂部）～10m（扇端部）に及ぶ。標高10～5m前後にかけては、扇状地末端から平野部の移行部であり、南より北鳥池・古下・鬼虎川遺跡などがある。平野部では遺跡は、旧大和川の自然堤防上に立地している。例えば南より山賀・上小阪・瓜生堂遺跡がある。^{注3} 山賀遺跡は平野部で最も早く開始された前期の遺跡である。^{注4} 瓜生堂遺跡は中期に発展した遺跡で、多くの方形周溝墓が検出されている。

鬼虎川遺跡は先に述べた様に、扇状地末端から平野部へ移行する所に立地し、弥生時代前期に開始され、中期末まで継続した。中期になって遺跡の規模も拡大し、大きく発展している。当遺跡では弥生時代前期から農耕を開始しており、河内平野の農耕集落を考える上で重要な遺跡である。

注1 「皿池の調査報告」 東大阪市遺跡保護調査会 1976。

2 稲井政正・都出比呂志 「原始・古代の枚岡」 1966。

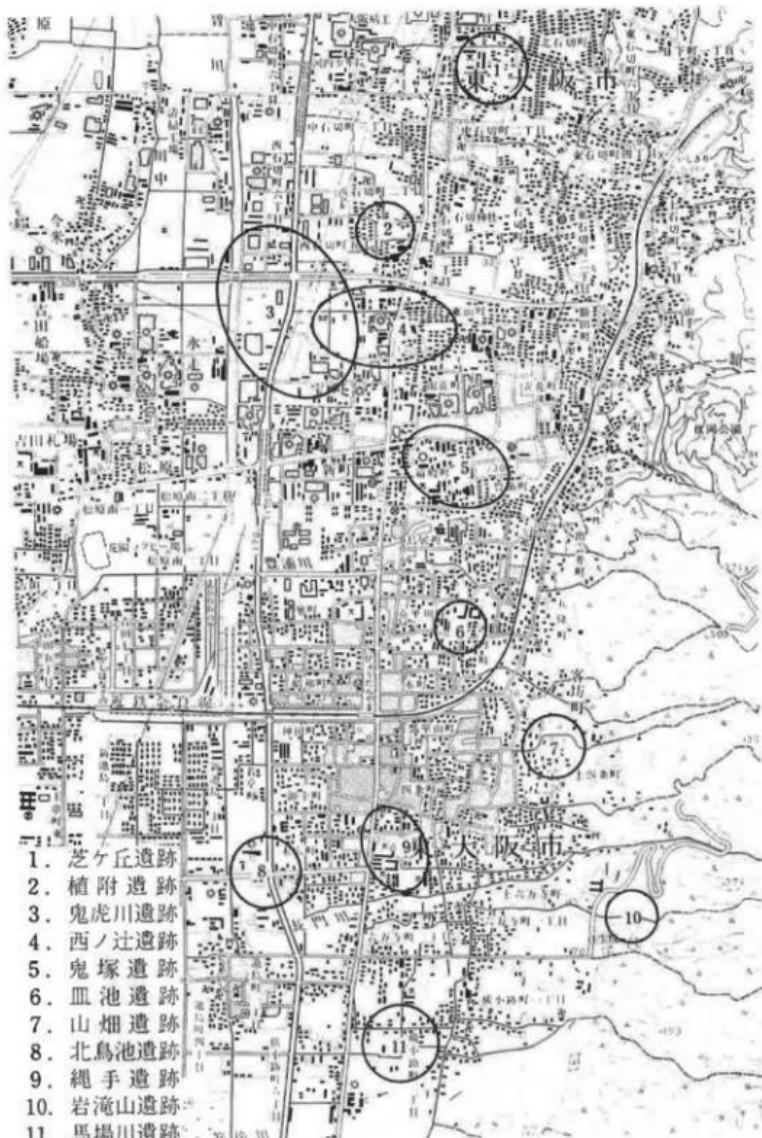
3 「東大阪市岩滝山遺跡の調査」 大阪府農林部 1971。

4 「河内古代遺跡の研究」 大阪府立花園高等学校 1970。

5 小林行雄・杉原莊介 「弥生土器類成資料編」 1958。

6 「近畿自動車道天理～吹田線建設予定期内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次調査報告書」 大阪府文化財センター 1975。

7 「瓜生堂遺跡II」 瓜生堂遺跡調査会 1973。



第1図 遺跡周辺図

第3章 調査の概要

1) 基本層序 (第3図)

鬼虎川遺跡における今回の発掘は、水道管の敷設予定域に沿って東から西へ第4次、第5次、第6次の3回にわたって実施された。発掘地域内の地区割は、第2図に示すように第4次発掘域と第5次発掘域との境界を起点として、第4次発掘域では西から東へA～Fの6地区（以下4 A地区、4 B地区……と呼ぶ）に、第5次発掘域では東から西へA～Nの14地区（以下5 A地区、5 B地区……と呼ぶ）に分け、さらに第6次発掘域では5 N地区的西側に始まってさらに西方へとA、Bの2地区（以下6 A地区、6 B地区と呼ぶ）に分けた。

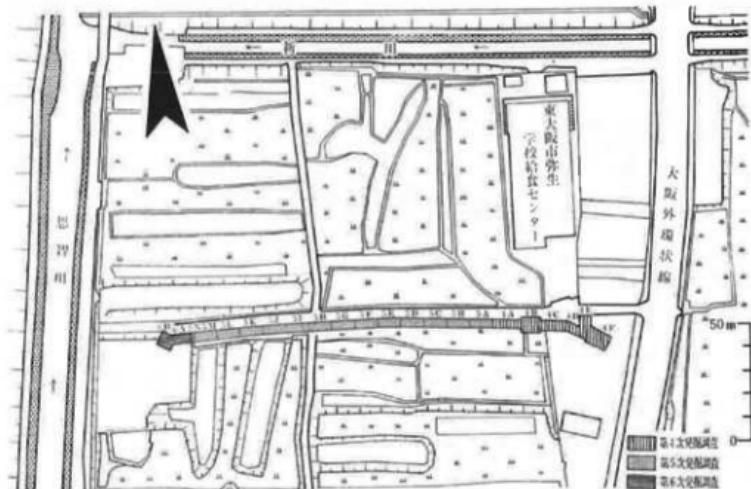
各地区的広さは東西長10m、南北幅4m（5 A地区～5 N地区および6 A地区）を基準としたが、4 A地区～4 F地区および6 B地区は水道管敷設予定域との関係で基準とは異なる地区割をした。

各地区ごとの層序、層相変化、遺構、および出土遺物等については次節以降に記述することとして、本節では各地区を通じての基本層序を述べる。なお、第1層から第6層までは発掘に先行して実施された5 B地区東端での試掘によって確認された層序である。

第1層：現在の水田耕土、層厚26cm。

第2層：暗褐色砂質シルト層、層厚17cm。

第3層：茶褐色砂礫層、層厚16cm。



第2図 各次調査地域の地区割図

1. 細土
2. 暗褐色砂質シルト層
3. 茶褐色砂質層
4. 黄褐色砂質シルト層
5. 暗茶褐色砂質粘土層
6. 黄褐色シルト質粘土層
7. 灰色砂礫層
8. 灰色粘土層
9. 暗灰色粘土層
10. 黑色粘土層
11. 淡青灰色粘土層
12A. 灰色砂層
12. 淡灰色粘土層
13. 淡褐色粘土層
14. 茶褐色粘土層
14A. 暗赤褐色砂質粘土層
14B. 淡灰褐色 粘土層
15A. 淡灰色粘土層
15. 黑色粘土層
16. 黄褐色粘土層
17. 淡灰色シルト質細砂層

第3図 遺跡地の基本層序

流れる自然路の堆積物で、中～粗粒砂から成り、5F～5J地区に認められる。5I地区では杭群が検出されている。

第13層：灰褐色粘土層、層厚15～30cm。5F地区西端以東にのみ認められ、植物片や炭片がラミナ状に存在する。また特徴的な黄白色粘土の薄層を2～3枚挟在する。畿内第1様

第4層：褐灰色砂質シルト層、層厚10cm。
第5層：暗茶褐色砂質粘土層、層厚30cm。

第6層：黄褐色シルト質粘土層、層厚39cm。

第7層：灰色砂礫層、層厚約180cm。10数層の砂層および砂質シルト層から成るが、細～中礫を含む砂層が優勢で、各層は一般に連続性に乏しい。古墳時代の遺物も含むが、奈良時代およびそれ以後の遺物をまれに産出する。

第8層：灰色粘土層、層厚10～40cm。きわめて連続性が良く、層相変化も少ない。考古遺物は発掘されていない。

第9層：暗灰色粘土層、層厚約20cm。5B地区以東にのみ認められ、4A地区からは須恵器が発掘されている。

第10層：黒色粘土層、層厚約10cm。きわめて微細な炭片を多量に含み層相変化が少なく、地層の連続性はきわめて良い。考古遺物は発掘されていない。

第11層：淡青灰色粘土層、層厚5～10cm。5A～5F地区にのみ認められる。

考古遺物は発掘されていない。5A地区および5B地区では中・下部に小規模な砂層をレンズ状に挿在する。

第12層：淡灰色粘土層、層厚15～45cm。5A地区以西に分布し、4A地区以東には認められない。

第12A層：灰色砂層、最大層厚100cm。蛇行しながら南南東から北北西方向に

式（以下畿内を略す）から第IV様式までの弥生式土器を含むが、I・II様式のものは少く、III様式のものが最も多い。

第14層：茶褐色粘土層、層厚20~40cm。全城に広く分布し、植物遺体を多く含む。II様式およびIII様式の弥生式土器が多く含まれる。

第14A層：赤褐色砂質粘土層、層厚15~40cm。5E地区中部から5J地区中部にかけて分布し、第14層直下に重なる。II様式およびIII様式の弥生式土器が含まれる。

第14B層：暗灰褐色粘土層、層厚15~20cm。5G地区西部から5J地区東端までの地域に、第14A層直下の浅い凹部を埋積して存在する。II様式の弥生式土器を含む。

第15層：黒色粘土層、層厚15~70cm。5B地区以東および5J地区以西に分布し、4A地区以東では暗灰色~暗褐色を呈する連続性の悪い数枚の粘土層にわかれる。I様式およびII様式の弥生式土器を含む。

第15A層：暗灰色粘土層、最大層厚60cm。5B地区西端から5G地区にかけて分布し、第15層の同時異相と考えられる。考古遺物も第15層と同様の出土状況を呈する。

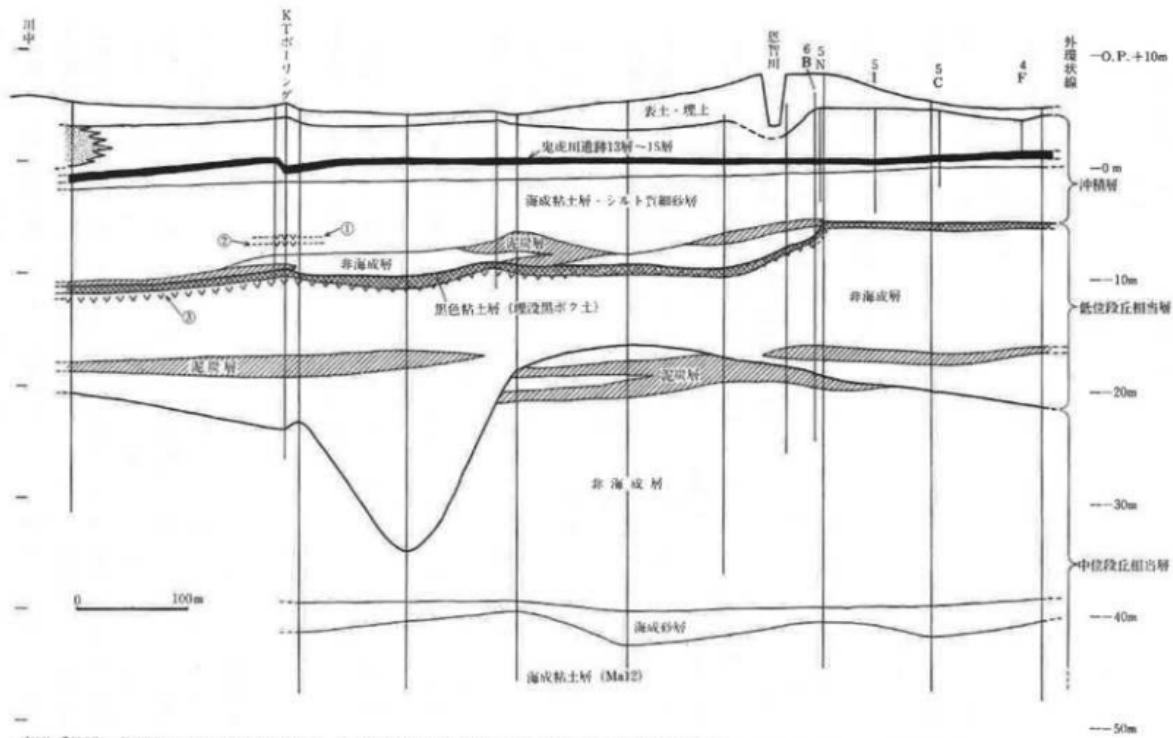
第16層：黄灰色粘土層、下位に向って次第にシルト質または砂質になり、暗灰色シルト質細砂層に漸移する。発掘時におけるいわゆる「地山層」であり、全域的な掘削調査は行なわなかったため、本層の下限および層相変化などについては明らかでない。従って本層の定義は下し難いが、一応「下位の海成沖積層の上位に整合に重なる、淡水域に堆積した砂質シルト層~粘土層で、層厚は1.0~1.5m」とする。

第16層より下位の地層については、弥生時代鬼虎川遺跡の「地山層」であると判断されるため発掘調査は実施しなかった。しかし遺跡の立地環境の成立過程を明らかにすることと、より古い時代における人類活動の痕跡の存否を確認することを目的として、発掘調査終了後に工事による掘削の機会を利用して、また、水走北方、府道「築港一枚岡線」南側の水田（第25図）で掘進深度35.5mのボーリング（KTボーリングと略称）を実施し、さらに既存のボーリングデータを利用して層序の検討を行なった。以下にその概要を記述する。

沖積層

さきに記した第16層以上の非海成層の下位には、海成シルト質細砂層、海成粘土層、非海成泥炭・粘土質砂互層と重なる。

海成シルト質細砂層：海成沖積層の最上部に位置する細砂混りシルトないしシルト質細砂層で、層厚は1.5~2m。上面は5C地区以東ではほぼO.P.+0mであるが西方へ向って次第に高度を下げ、KTボーリング実施地点ではO.P.-2mの深さに達する。多くのサンド・パイプと共にミドリシャミセンガイを多産し、その他に上部ではオキシジミを、下部ではサルボウ？を伴出することが5C地区の深掘りと5I地区で行われた既存水路下をぬける工事の折に確認されている。この海成シルト質細砂層は5C地区以西5N地区まで連続する事が検土杖によって確認されており、その西方延長はKTボーリングの



府道「築港一枚岡線」ぞいの地質断面図。太い実線は不整合面、垂直の細い実線は柱状図位置を示す。「築港一枚岡線」から離れた位置の柱状図は、南北方向に投影した。①：KA-1 火山灰層、②：KA-2 火山灰層、③KL-1・2 火山灰層。 ポーリング位置については第25図参照のこと。

第4図 地質断面図

G. L. -5.6~6.9m にも認められている。5C 地区の海成シルト質細砂層上部 (G. L. -5.13~6.20m) から採取された木片の¹⁴C 年代は 5,090±140 年 B. P. (Gak-7524) であった。

海成粘土層：5N 地区以東では層厚 3~3.5m であるが、それより西では次第に厚さを増し、約 7m に達する。5I 地区の本粘土層の最上部（暗灰色シルト質粘土）から採取された貝殻はゴイサギとウラカガミが非常に多く、他にハマグリ、イヨスダレ、イセシラガイ、カガミガイ、ヒメカノコアサリ、ゴマフダマ、アラムシロ、ヒロオビヨウバイなどが含まれていた。6B 地区では G. L. -11.2m (O. P. -4.7m) で海成粘土層の下底が観察され、中疊混りの砂質粘土からウラカガミ、ゴイサギ、ナミマガシワ、マガキ、ハマグリ、イチョウシラトリガイ？、ゴマフダマなどの貝殻が産出した。また、海成層下底面から直下の泥炭質粘土・砂・シルト互層中に多数のサンド・パイプ（径約 3cm、最大長約 1.5m）が穿たれていた。KT ポーリングでは O. P. -6.9m から -13.2m までが海成粘土層で、その下部に 2 枚の火山灰層を挟む。両火山灰層は河内平野の他地域でも確認されているので、上位のものを河内沖積第 1 火山灰層（略称 KA-1）、下位のものを河内沖積第 2 火山灰層（略称 KA-2）と呼ぶことにする。

KA-1 火山灰層：層厚 9cm の黄灰色細粒ガラス質火山灰層で、G. L. -10.80~10.89m (O. P. -6.60~6.69m) に存在する。火山灰層の直上は火山ガラスを多量に含む海成粘土であるが火山ガラスの量は上方に向って漸減する。

KA-2 火山灰層：層厚 11cm の細粒ガラス質火山灰層で、見かけは KA-1 火山灰層に酷似するが、下半の 7cm はやや粗粒である。G. L. -11.46~11.57m (O. P. -7.26~7.37m) に存在し、KA-1 火山灰層との間隔は 57cm である。この火山灰層直上の海成粘土層中にも多量の火山ガラスが含まれるが、その量はやはり上方に向って漸減する。両火山灰層の間隔は非常に狭いが、KA-1 火山灰層はその層相と堆積環境から考えて KA-2 火山灰層の再堆積ではないと判断され得る。

非海成泥炭・粘土質砂互層：泥炭層または褐色有機質粘土・シルト層と、細疊混り中～粗粒砂層の互層で、最大層厚約 3m。6B 地区の G. L. -12.4m (O. P. -5.9m) では現地性の樹根と直立した樹幹が観察された。

低位段丘相当層

5N 地区以東には O. P. -5m に埋没低位段丘面が存在する。この面は 6B 地区で西に傾く段丘崖状に高度を下げ、恩地川の西で O. P. -9m に達する。さらに西では O. P. -8.5m とやや高い所もあるが全体として高度を下げ、O. P. -11.2m に達する。今回の調査範囲内にはこの面に刻まれた顕著な埋没谷は認められなかった。低位段丘相当層を構成する地層は細疊混りの砂層とシルト～粘土層の互層で、泥炭層ないし泥炭質粘土層を挟む、全層が非海成層である。中位段丘層との間の不整合面上には細～中疊を含む砂がちの基底砂疊層が存在する。層厚は 5N 地区以東では 14~16m、それより西では最

も薄い所で7.3m、中位段丘面に刻まれた谷部で24.5mある。

最上位には厚さ0.5~1mの黒色粘土層がある。この黒色粘土層は一部では水中堆積と思われる層相を呈するが、ほとんどは埋没黒ボク土と考えられるきわめて特徴的な層相を呈し、また一部では直下の緑灰色シルト層中に生じた乾裂中に落ち込んでいる。

黒色粘土層中、またはその直下には2枚の火山灰層が挟在されており、上位のものを河内低位段丘第1火山灰層(略称KL-1)、下位のものを河内低位段丘第2火山灰層(略称KL-2)と呼ぶ。

KL-1火山灰層：最大層厚2cmで、レンズ状に断続する乳白色細粒火山灰層。6B地区のG.L.-13.65m(O.P.7.15m)で確認された。

KL-2火山灰層：層厚16~18cmで3層から成り、最下部約1cmは白色の細粒火山灰層、その上約10cmはやや肌色がかった灰色の細粒~中粒火山灰層で、最上部は極細粒の火山灰層で覆われる。

KL-1火山灰層とKL-2火山灰層の間は6~8cmの泥炭層または粘土層によって隔てられている。KL-2火山灰層の下底は6B地区でG.L.-13.9m(O.P.-7.4m)、KTボーリングでG.L.-15.16m(O.P.-10.96m)である。

KTボーリングの低位段丘相当層中部の粘土層中に含まれていた木片(G.L.-22.31~22.39m)の¹⁴C年代は38,510±1,430年B.P.(Gak-7523)であった。

中位段丘層相当層

埋没中位段丘相当層上面の深さは、最も浅い所でO.P.-16m、低位段丘相当層で埋積された埋没谷の底でO.P.-34.5mである。O.P.-39.6~38.5mより上位は非海成の粘土・砂互層で、それより下位は海成層である。海成層のうち上部1~3mは海成シルト質砂層で、下部は海成粘土層である。

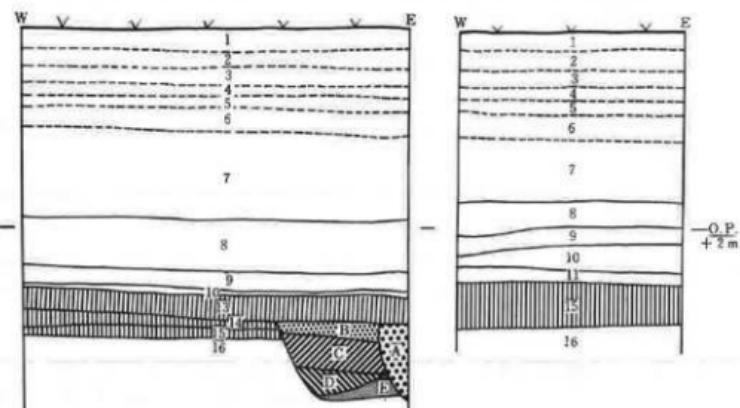
2) 第4次調査の概要(第5図)

第4次調査の対象面積は270m²であり、西より6地区に分けて調査をおこなった。調査地内にはすでに基礎杭が打ち込まれているためかなりの擾乱を受けている。このために杭の間を精査しながら、遺構・遺物の検出に努めた。

層位は、4A地区で厚さ約80cmの包含層を認め、14・15層に区分したが、東へいくにしたがって薄くなり、4F地区では40cmほどとなり、層を分けることもできなかった。第10層は第4次調査区全域に厚さ約20cmで分布している。第16層は、4A地区でO.P.0.9mを測り、東へいくにしたがってゆるやかに上り、4F地区ではO.P.1.5mを測る。

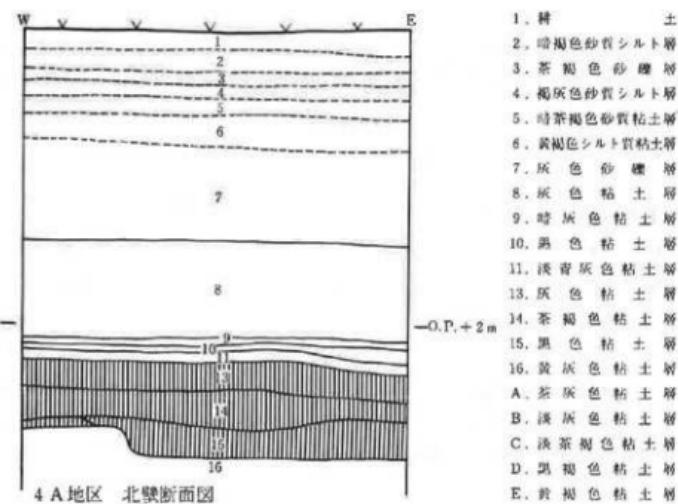
4D・E・F地区(第6図)

4D・E・F地区は、第4次調査地域の東端地点にあたり、4D地区24m²、4E地区33m²、4F地区61m²、計約118m²の調査範囲にあたる。この地区での遺構は、井戸1基・溝2カ所・ビ

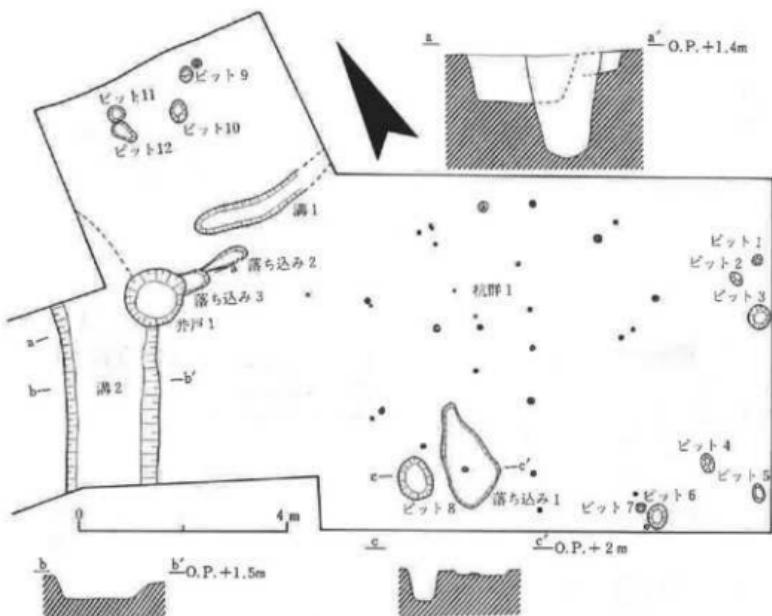


4 D 地区 北壁断面図

4 F 地区 北壁断面図



第5図 第4次調査地断面図



第6図 4 D・E・F地区平面図

ピット12カ所・落ち込み3カ所・杭30本を検出した。出土遺物は、弥生土器・石器・各種の木器・骨製品・自然遺物（骨・貝・種子など）を多数発見した。

溝 1

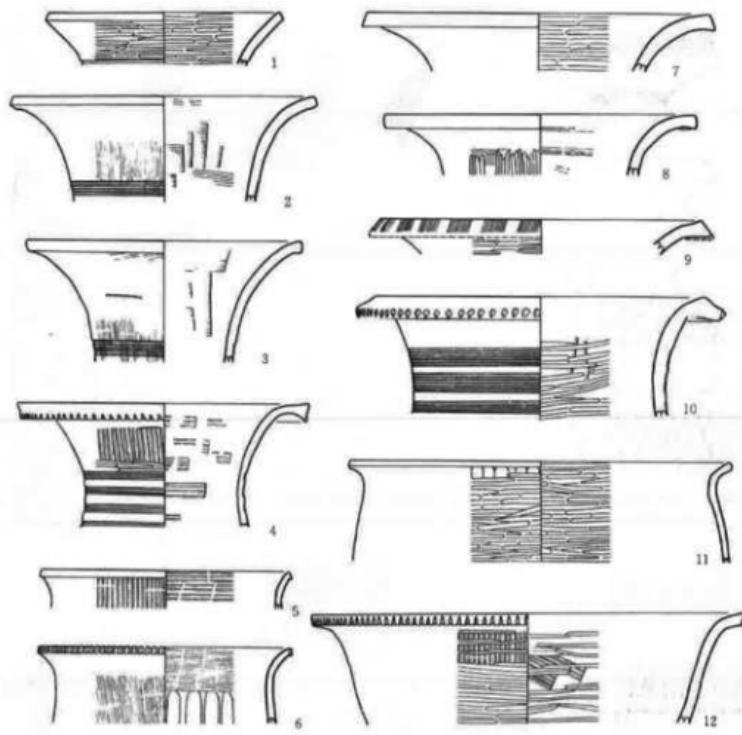
4 E 地区中央部で東西方向に走り、井戸 1 の手前で袋状に終わっている。溝の規模は、幅50cm、深さ12cmを測り、溝底面のレベルは袋状を呈して終る部分が最も低く、西へ徐々に高くなっている。溝内より畿内第Ⅰ様式・Ⅱ様式（以下畿内を略す）に属する弥生土器が出土している。

〈出土遺物〉（第7図）

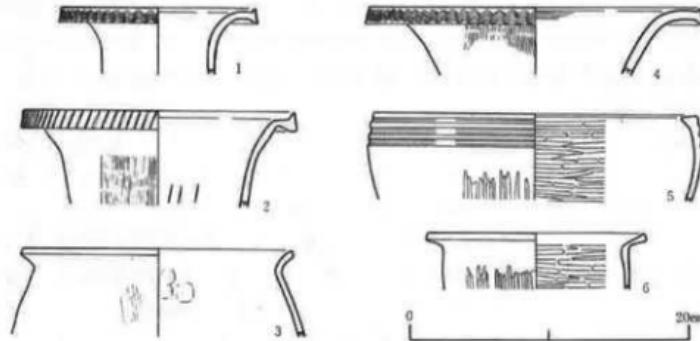
壺 (1)は短く斜め上方へ伸びる口縁端部は面をもち、頸部に沈線文を施す。第Ⅰ様式に属すると思われる。(2)・(3)・(4)は筒状の頸部から斜め上方に外反する口縁部をもち、頸部に櫛描直線文を施す。端部を下方に拡張し、刻み目を施すものもある(4)。第Ⅱ様式に属する。

甕 (5)は、肩の張らない体部にわずかに外反する口縁部をもつ。口縁部外面に縱方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目を施す。第Ⅱ様式に属する。(11)はやや丸く張り出す体部になだらかに外反する口縁部をもつ。口縁部内外面にヘラミガキ調整を施す。第Ⅱ様式か。

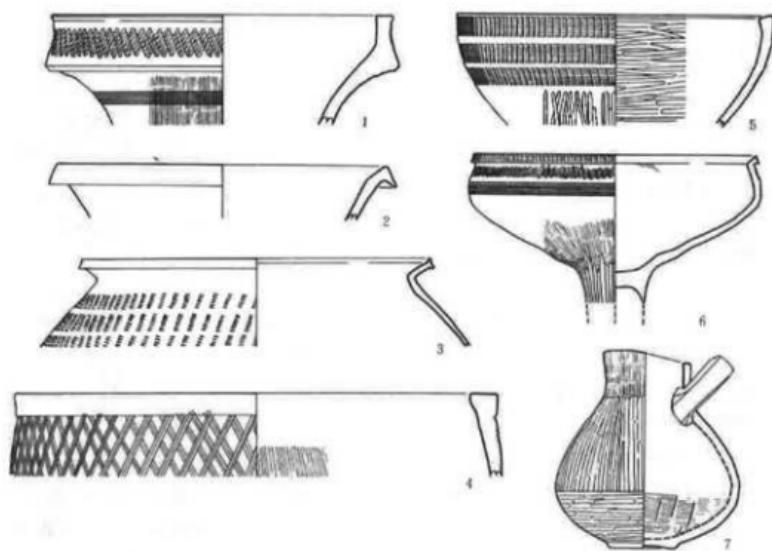
鉢 (12)は鉢の口縁部と思われる。ゆるやかに外反する口縁部に端部は面をなし、端面に刻み目を施す。第Ⅰ様式に属する。



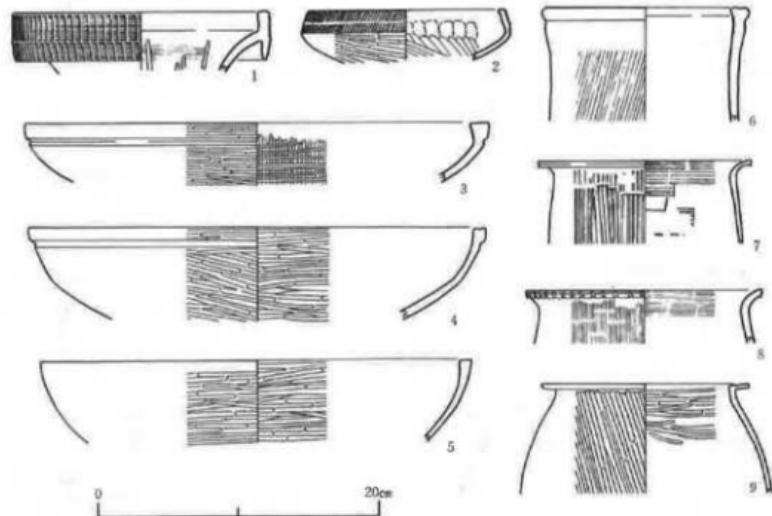
第7図 溝1内出土遺物



第8図 落ち込み1内出土遺物



第9図 井戸1内出土遺物



第10図 溝2内出土遺物

溝 2

4 D 地区と 4 E 地区との境部分で検出した。今回の調査では、調査地域の制約から南北方向に走る延長3.5mのみを検出したにとどまった。溝の規模は、幅1.8m、深さ0.84mを測り、断面U字形を呈する。溝底は、南側とで約10cmの差が認められ、なだらかに南へ傾斜していたことが伺われる。溝内の層位は、粘土層を三層に区分することができる。自然木などの植物遺体を多く出土するところから、溝内の水流は、比較的緩慢であったと思われる。溝 2 は、北側で井戸 1 によって右肩を切られており、北側部分での溝の肩は検出できなかった。溝内より畿内第Ⅱ様式・Ⅲ様式に属する土器が少量出土している。

〈出土遺物〉 (第10図)

壺 (1)は外開きの頸部に口縁端部を上下に拡張し、三条の簾状文を施す。畿内第Ⅲ様式に属する。

甕 (7)は肩の張らない体部に屈曲して開く口縁部をもち、口縁部外面を縦方向の刷毛目、内面を横方向の刷毛目で調整を施す。(8)は丸く外反する口縁端部に刻み目を施す。第Ⅲ様式か。

高杯 (2)は腰に棱をもち、内傾して立ち上がる直口の口縁部に浅い杯部をもつ。口縁部外面にこまかに簾状文を施す。第Ⅲ様式に属する。(3)・(4)・(5)はなだらかな曲線を描く体部に直口の浅い杯部を有する。口縁端部は面をもち、(3)・(4)は口縁外面に一条の凹線文を施す。第Ⅲ(新)～Ⅳ様式に属する。

井戸 1

溝 2 の北東の肩を一部切って掘り込んでいる。上面ではほぼ円形を呈する素堀りの井戸である。規模は、上面で径2.8cm、底面で0.8cm、深さ2mを測る。井戸内からは畿内第Ⅲ様式からⅣ様式に属する土器が出土している。特に井戸底には、水差形土器が完形で1点出土しており、井戸水の汲上げ用に使用したとも考えられるとともに、井戸の使用時期を決定できる。溝 2 は、断面観察の結果、第14層上面よりの掘り込みと思われ、井戸 1 も同一面からの掘り込みと考えられた。このことから、溝 2 ・ 井戸 1 の掘削時期はあまり時期を置かずに溝 2 に統いて井戸 1 が掘り込まれたものと考えられ、出土土器からも同様のことが伺われる。

〈出土遺物〉 (第9図)

壺 (1)は、外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部をもち、曲折部分を下方にわずかに拡張する。口縁部内外面をヨコナデし、端部はわずかに肥厚し、立ち上がり部分に波状文を一帯施す。頸部には横描直線文を施す。(2)は外開きの頸部に外反する口縁部、端部を下方に拡張して無文。第Ⅲ様式に属する。(7)は水差形土器、算盤珠状に張った体部に筒状の頸部をつけ、ほぼ直立する口縁部をもつ。口縁部上端は面をなす。肩部に横位の半環状把手をもち、口縁部把手側を一段持ち込む。第Ⅳ様式に属する。

鉢 (5)は斜め上方に広がる体部で口縁部はわずかに内寄する端部を内側に肥厚、口縁部外面に三条の簾状文を施す。(6)は台付鉢である。段状の口縁部をもち、口縁部上端が内側へ傾斜し、腹径が口径をわずかに上まわる。口縁部端面に簾状文・体部上半に波状文・直線文を施す。第

Ⅲ様式に属する。

甕 (3)は肩の張った器体に屈曲して聞く口縁部をもち、端面をわずかに上下に拡張する。体部上半に櫛原体による列点文を施す。第Ⅲ様式に属するか。

落ち込み 1

F 地区南側で検出した。規模は、長径200cm、短径85cm、深さ 8 cm を測り、不整形な楕円形を呈する。8 cmほど掘り込んだ落ち込み底部で、上層より打ち込まれた杭を一本検出している。この落ち込みが廃絶したのちに打ち込まれたものと思われる。落ち込み内より第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の土器が出土している。

〈出土遺物〉 (第 8 図)

甕 (6)は、肩の張らない体部に屈曲して聞く口縁部をもつ。口縁部内外面をヘラミガキで調整を施す。(3)は、丸く張り出す体部になだらかに外反する口縁部をもつ。端部は面をもって終る。第Ⅱ様式～第Ⅲ様式に属する。

落ち込み 2・3

4 E 地区中央で楕円状の落ち込み 2・3 を検出した。落ち込み 2 は、落ち込み 3 によって切られ、落ち込み 3 は、井戸 1 によって切られている。落ち込み内には遺物は認められなかった。

ピット 1～2

4 E・4 F 地区で杭群を取り囲むように計12カ所のピットを検出した。各々のピットの規模は第1表の通りである。ピット 3 内より、第Ⅲ～第Ⅳ様式の土器に混って、シリブトビシ（ヒシの実）が出土している。ピット 8 より、第Ⅲ様式に属する土器を若干検出している。ピット 3・8 は、他のピット群と比較しても規模も大きく、貯蔵穴などの施設になる可能性を考えられる。

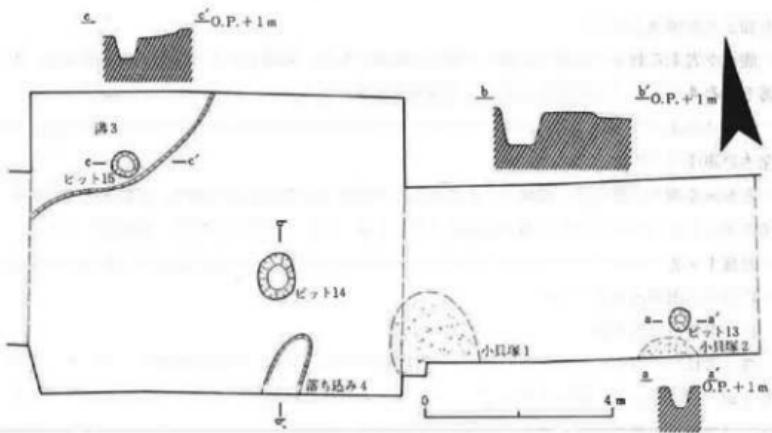
〈出土遺物〉 (第 8 図)

ピット 3

甕 (4)は斜め上方に外反する頸部に水平に曲る口縁部をもつ。端部をわずかに拡張し、端面に波状文を施す。

	規 模	備 考		規 模	備 考
ピット 1	径 18cm 一深14cm	4 F 地区	ピット 7	径 16cm 一深 7 cm	4 F 地区
2	長径26cm・短径18cm～深23cm	4 F 地区	8	長径80cm・短径66cm～深56cm	4 F 地区、B 様式の土器出土
3	径 42cm 一深40cm	4 F 地区 ピット 3 内より、シリブトビシ ヒシの実出土	9	径 36cm 一深14cm	4 E 地区
4	長径36cm・短径24cm～深13cm	4 F 地区	10	長径42cm・短径30cm～深20cm	4 E 地区
5	長径32cm・短径25cm～深28cm	4 F 地区	11	径 30cm 一深25cm	4 E 地区
6	長径46cm・短径36cm～深28cm	4 F 地区	12	長径50cm・短径30cm～深11cm	4 E 地区

第1表 4 E・F 地区ピット計測表



第11図 4 B・C地区平面図

鉢 (5)は、口縁部がやや内弯し、端部は直口して終っている。端面はわずかに内傾し、やや内方に肥厚する。口縁部外面に三条の凹線文を配する。第III～第IV様式に属する。

ビット 8

壺 (1)は、短く直立する口頸部になだらかに外反する口縁部をもち、端面を上方に拡張し、波状文を施す。(2)は、斜め上方に伸びる頸部より水平に曲る口縁部をもつ。端部を上方に拡張し、ヘラ先による刻み目を施している。第III様式に属すると思われる。

杭群 1

4 F 地区を中心にして一部 4 E 地区にも及び約30本の杭を検出した。杭は、径約20cmのものから2～3cmのものまでさまざまに認められた。大半のものが自然木の先端を尖らして杭として使用しており、転用材は認められない。杭列は、4 F 地区中央にほぼ南北に並ぶ他は不規則であり、柵列等に使用されたかもしれない。杭はほとんどが弥生包含層上面で、削り取られている。

B・C 地区（第11図）

第4次調査の中央部にあたり、B 地区50m²、C 地区30m²、計80m²の調査範囲にあたる。B・C 地区では、ビット 3 カ所、落ち込み 1 カ所、小貝塚 2 カ所を検出した。

ビット13・14・15

ビット13は、C 地区中央寄の地点で検出した。ビットは、ほぼ円形を呈し、径44cm、深さ49cmを測る。ビット14は、B 地区中央で検出した。規模は、長径98cm、短径76cm、深さ49cmを測る。ビット内より加工木が出土している。ビット15は、溝 3 の北側の底面を抜いて掘り込まれている。規模は、長径56cm、短径50cm、深さ48cmを測る。ビット内からシリブトビシ・ヒョウタン・ドングリが出土している。B・C 地区のビットは、不規則に分布しており、ビット内よ

り加工木や植物遺体を検出したことから貯蔵穴の可能性が考えられる。

落ち込み4

落ち込み4は、南側が調査範囲外に広がるため全体の規模は不明であるが、長径112cm、短径70cm、深さ6cmを測る。遺物は認められず、性格等は不明である。

小貝塚1・2

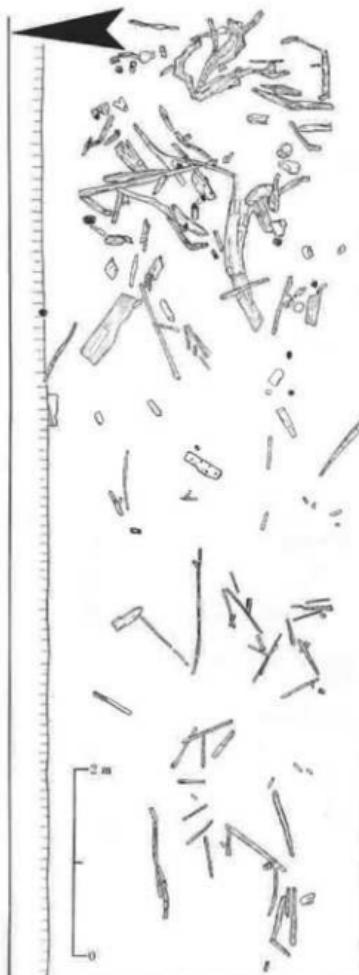
C地区の南西と南東の2カ所で貝殻が集積し、小貝塚を成す地点を検出した。小貝塚①は、南を調査地の範囲に広がるために全体の規模は不明であるが、径約1mの範囲で貝類の集積が認められた。貝類は、アカニシが最も多く、シジミ、イシガイ、タニシも認められると言う。貝塚は、包含層内に20~30cmの厚みをもって堆積していたもので、ピット等の遺構もなく、地山をも掘り込むことはなかった。ただ、貝層の中央付近で最も貝類が多く、貝殻の保存状態も良好であったが、周辺部ではこまかく破損した貝殻片が散らばっている状態が確認された。小貝塚②は、小貝塚①より貝層の範囲が若干広く、径約1.2mの範囲で認められた。貝層の堆積状況は①の場合と全く同様である。

4A地区（第12・13図）

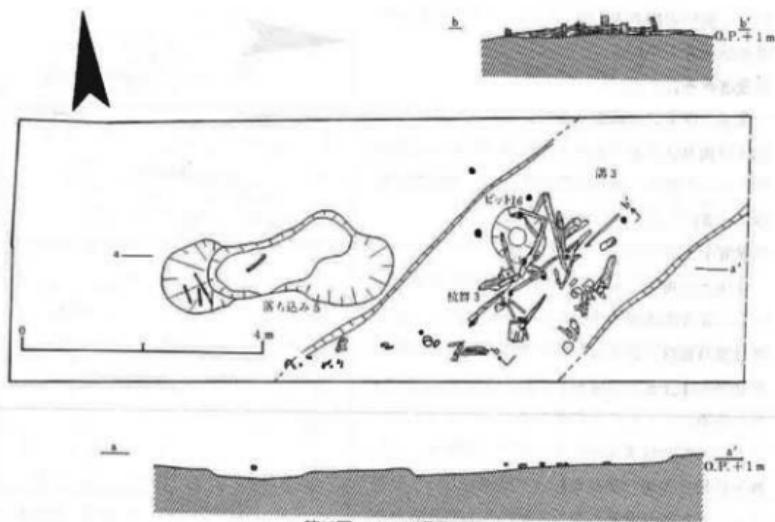
4A地区は、第4次調査の西端にあたり、調査面積60m²の範囲であった。検出した遺構は、溝1カ所、ピット1カ所、落ち込み1カ所であった。

溝3・杭群3

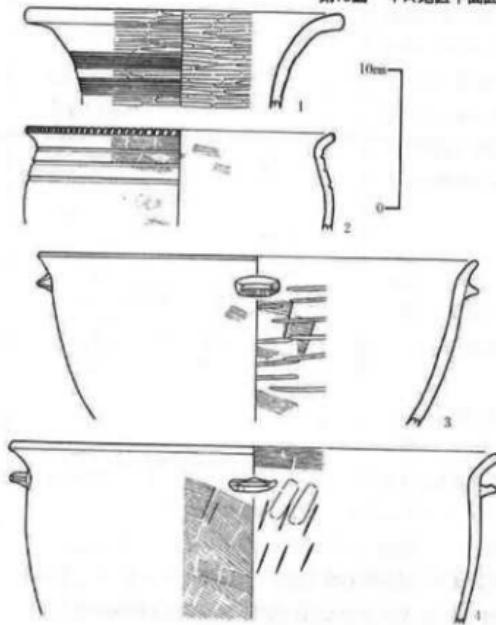
B地区の北西隅からA地区を斜めに横切って走る溝で、16層を掘り込んでつくられている。規模は幅約3m、深さ20cmを測る。溝中央に溝と直交する杭群3を検出した。杭群3は、径5~10cm前後の杭を垂直あるいは多少角度をつけて打ち込んでいる。横木は、あたかも杭に流れ込んだ状態で、杭の根元に集積しており、杭に結びつけたような痕跡は認められなかった。通常しがらみ状遺構に伴なう葺・柴なども認められなかった。この杭群が溝の流れを調節した施設であるとすれば、溝の両肩附近に杭も横木も少なく、機能をなし得ないところから、問題点を残している。溝中央の杭間には木製の鍬・鋤や土器な



第12図 4A地区遺物出土状況



第13図 4A地区平面図



第14図 出土遺物

どの遺物も多く認められた。溝中央底面でビット16を検出した。規模は、径90cm、深さ21cmを測り、溝の構築時あるいはそれ以前に掘り込まれたもので、ビット内からは遺物もなく、性格はあきらかにできなかった。

〈出土遺物〉（第14図）

壺 (1)は筒状の頸部に斜め上方に外反する口縁部をもち、端部は丸く終る。頸部に櫛描直線文を施す。第Ⅰ様式に属する。

甕 (2)は丸く張る体部に外反する口縁部をもつ。端部に刻み目を施し、頸部に三条の弦線を施す。第Ⅰ様式にする。

鉢 (3)・(4)は、外反する口縁部で、端部は面をもって終る。

頸部に横位の扁平な耳状把手をもつ。第Ⅰ様式に属する。

落ち込み 5

溝3の西側で検出した。規模は、長径4m、短径1m、深さ0.5mを測り、不整形な楕円形を呈する。落ち込み内からの出土遺物はなく、時期、性格とも詳細は不明であるが、包含層の上層より掘り込まれた可能性が考えられる。

3) 第5次の調査概要（第15図）

昭和51年に実施した第4次の調査地域西端より、さらに西が第5次の調査地域である。調査は堆土の処理等の都合により2回に分け、5A～H地区を完掘した後、5I～N地区へと実施した。第5次の調査では、弥生時代の遺構面が最低2面あることが確認できた。主な遺構としては5B地区で溝と杭列、5D～E地区・5H地区・5I地区で杭列、杭群などを検出した。遺物は弥生土器（第Ⅰ～Ⅳ様式）、木製品（農耕具・容器）、石器・骨角製品・自然遺物などが出土した。

5A～N地区まで連続する層は、第1～8層、第10層、第12層、第14層である。第9層は5B・C地区の境、第11層は5E・F地区の境より西3m、第13層は5E・F地区の境で欠層となる。第14A層は、5E・F地区の境東2mから5I・J地区の境東5mまでにある。第14B層は、5G・H地区の境東2mから5I・J地区の境まである。第15層は、5B・C地区の境東3mから西と5I・J地区的境西1mから西にあり、この間に15A層がある。第12層の下に第12A層があり、これは東より西へ蛇行しながら流れる自然流路内の堆積物である。5A・B・H・I・M地区でレンズ状に堆積し、5H・I地区では1mにも達する。第13層は5B地区西で最も厚く40cmあり、東と西へいくにしたがい薄くなる。第14層は部分的に薄い所はあるがほぼ一定で30cmの厚さで堆積する。第14A層は5E・F地区の境と5I・J地区の境で最も厚く、その厚さは、約40cmである。第14B層は、ほぼ20cmで一定に堆積する。第16層は5B・C地区の境東3mで微高地を呈し、これを境にして西に粘性の強い第15層と東に粘性の弱い第15A層が堆積する。第15A層は5C・D地区で最も厚く60cmあり、西にいくにしたがって薄くなる。

以下、主要な遺構が検出された地区について詳細に述べる。なおピットは全域に分布しているので、後にまとめて記述する。

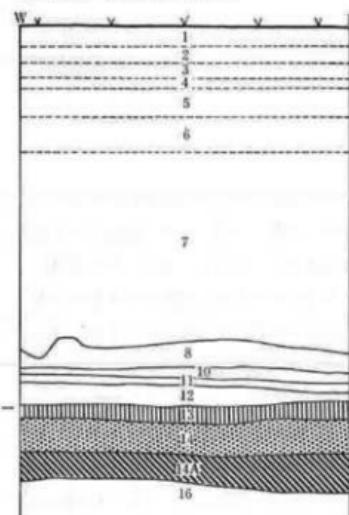
5B地区（第16・17図）

5B地区は、第5次調査地域の西側にあたり、調査面積が40m²である。検出した遺構は、溝3ヶ所と杭列1ヶ所であった。

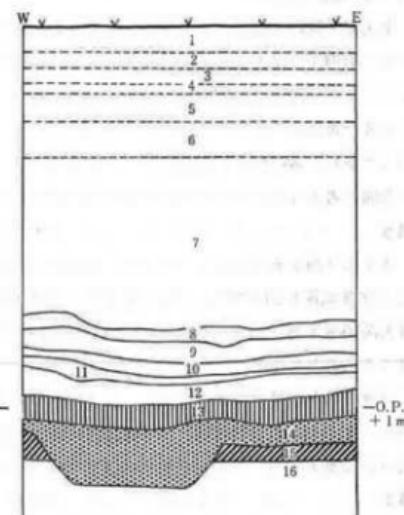
溝4

5A・B地区の境より西2mに位置する。溝は第15層上面より切り込んでつくられ、底が第16層まで至っている。ほぼ南北方向に走り、底が北から南に向かって、4m間で約15cmの落差がある。最大幅1.6m、最大深60cmを測る。横断面の形状は、底がわずかに平らなU字状を呈する。

5 E 地区 北壁断面実測図

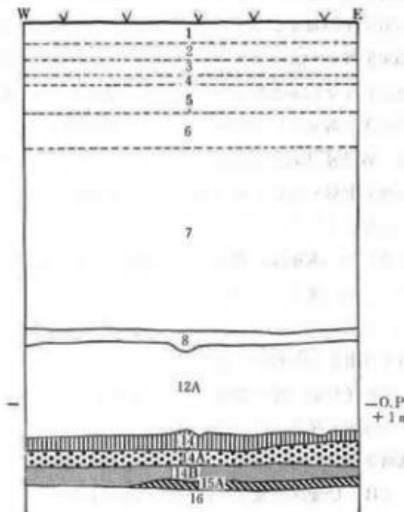


5 B 地区 北壁断面実測図



5 H 地区 北壁断面実測図

1. 赤 土
2. 暗褐色砂質シルト層
3. 茶褐色砂礫層
4. 暗灰色砂質シルト層
5. 暗茶褐色砂質粘土層
6. 黄褐色シルト質粘土層
7. 灰色砂礫層
8. 灰色粘土層
9. 暗灰色粘土層
10. 黑色粘土層
11. 深青灰色粘土層
12. 淡灰褐色粘土層
12A. 灰色砂層
13. 灰褐色粘土層
14. 茶褐色粘土層
14A. 暗赤褐色砂質粘土層
14B. 暗灰褐色粘土層
15. 黑色粘土層
15A. 暗灰色粘土層
16. 黄褐色粘土層



第15図 第5次調査地断面図

溝内には第14層の粘土が堆積しており、比較的多くの植物遺体を含む。遺物量は少ないが、弥生土器・狹歛・貝殻（シジミ）などが出土した。溝内から出土した土器は第Ⅱ様式である。しかし、溝内に堆積している第14層内には第Ⅱ～Ⅲ様式の遺物を含んでいる。これらのことから、溝の埋まった時期は第Ⅱ～Ⅲ様式の間に埋まると考えられる。

溝5

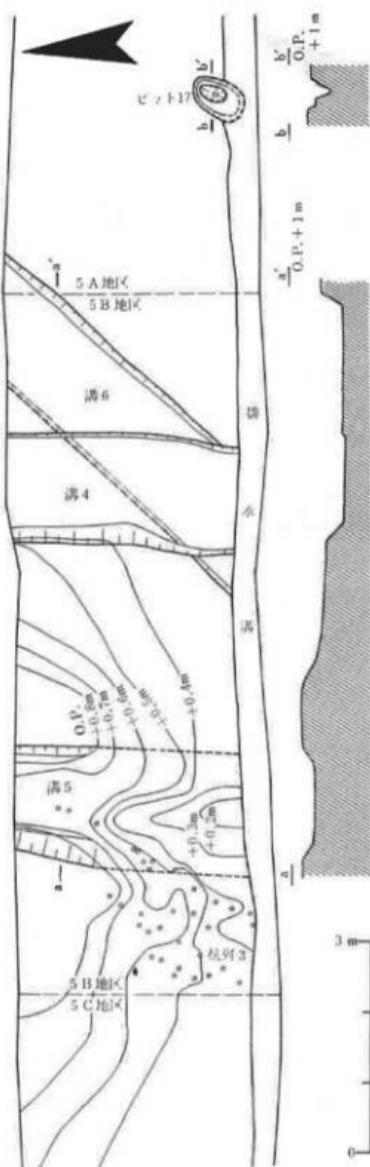
溝4より西3mに位置する。溝の切り込み面、方向は溝4と同様である。最大幅1.7m、最大深40cmを測り、横断面の形状はU字状を呈する。溝内から遺物は出土しなかったが、第14層の粘土が堆積することを溝4と切り込み面、方向が同様であることから第Ⅱ～Ⅲ様式の間に埋まると考えられる。

溝6

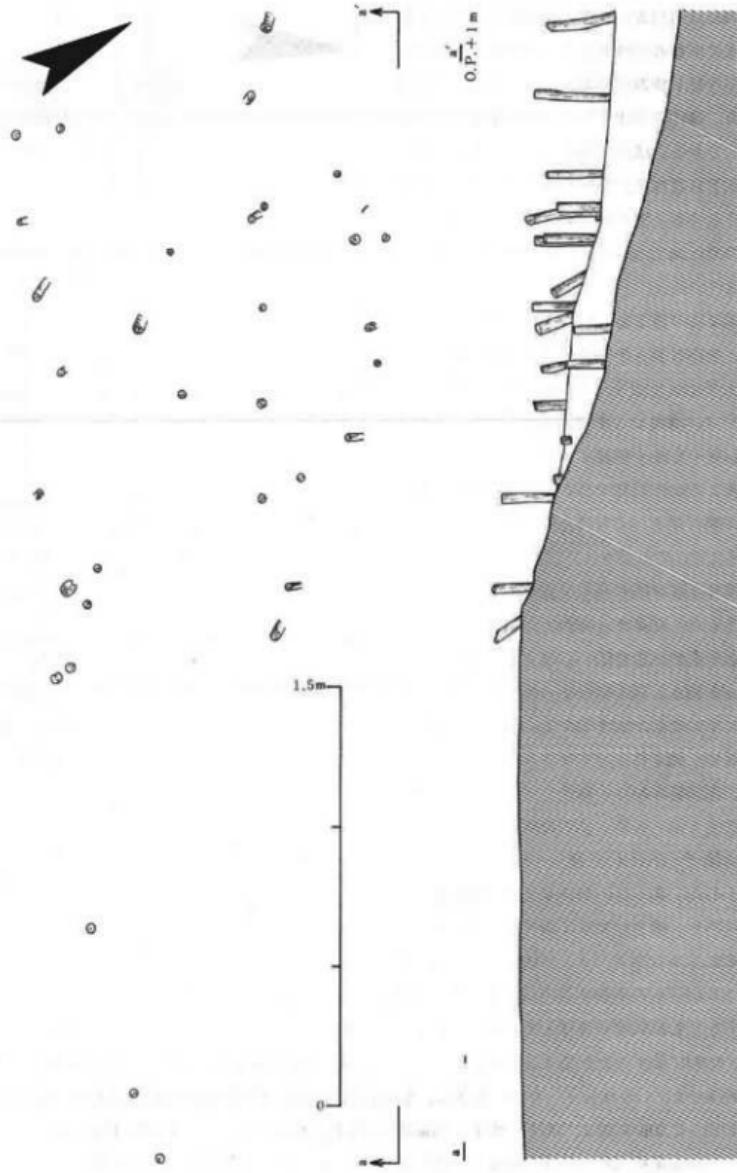
溝4とほぼ同じ所に位置し、第16層上面で検出した。北東から南西方向に走り、底は南西部が約10cmほど低い。最大幅1.5m、最大深35cmを測る。溝の横断面の形状は、底がわずかに平らなU字状を呈する。西肩と南東隅の東肩は、溝4によって切られている。溝内には、第15層の粘土が堆積しており、この中から弥生土器・石斧・動物遺体（イノシシ・鳥）・貝殻（イシガイ）・種子（オオモミ）などが出土した。溝6は、第16層上面が邊縁面であることと、溝4によって西肩などが切られていることから溝4・5より古い溝である。溝内より出土した遺物や溝内に第Ⅰ～Ⅱ様式の土器を含む第15層が堆積していることから、この時期に埋まると考えられる。

杭列3

5B・C地区の境よりわずかに東に位置する。杭列の遺構面は北側で最も高く、西・東・南の3方向へ傾斜している。北ではO.P.



第16図 5A・B地区平面図



第17図 5B地区杭列3

+80cm、南約3mではO.P.+30~40cmを測る。いわゆる微高地を呈する所から傾斜面に向けて杭列がある。杭列より東の等高線は南北方向で乱れている。これは、第15層上面で検出した溝5の掘削時の痕跡であり、本来は南へ突出する微高地の一部と思われる。杭列は、北東から南西に向けてほぼ一直線に2列並び、その幅は80~90cmを測る。また、杭と杭の間隔は約20~30cmである。杭列の左右約30cmにも数本の杭が短い列をなしている。前者とほぼ幅が一致することから打ちなおしたかあるいは補修した際のものと考えられる。杭は径3~5cm前後の太さのそろった丸杭を使用している。杭先端部は約5~10cmほど尖がられており、杭長が最も長いもので1.1mを測る。北側で数本の杭の頭が溝5によって切られている。溝によって切られていない杭の頭は、第15A層内の同レベルで検出した。杭列の時期は、第15層上面を遺構面とする溝5に杭の頭が切られていることと東約5mに位置する溝6とほぼ同方向に打ち込まれていることから第I~II様式の時期のものと考えられる。

5 D・E地区（第18図）

5 D・E地区の調査面積は、5 D地区が40m²、5 E地区が40m²で合計80m²である。検出した遺構は、杭群1ヶ所とピット3ヶ所であった。

杭群4

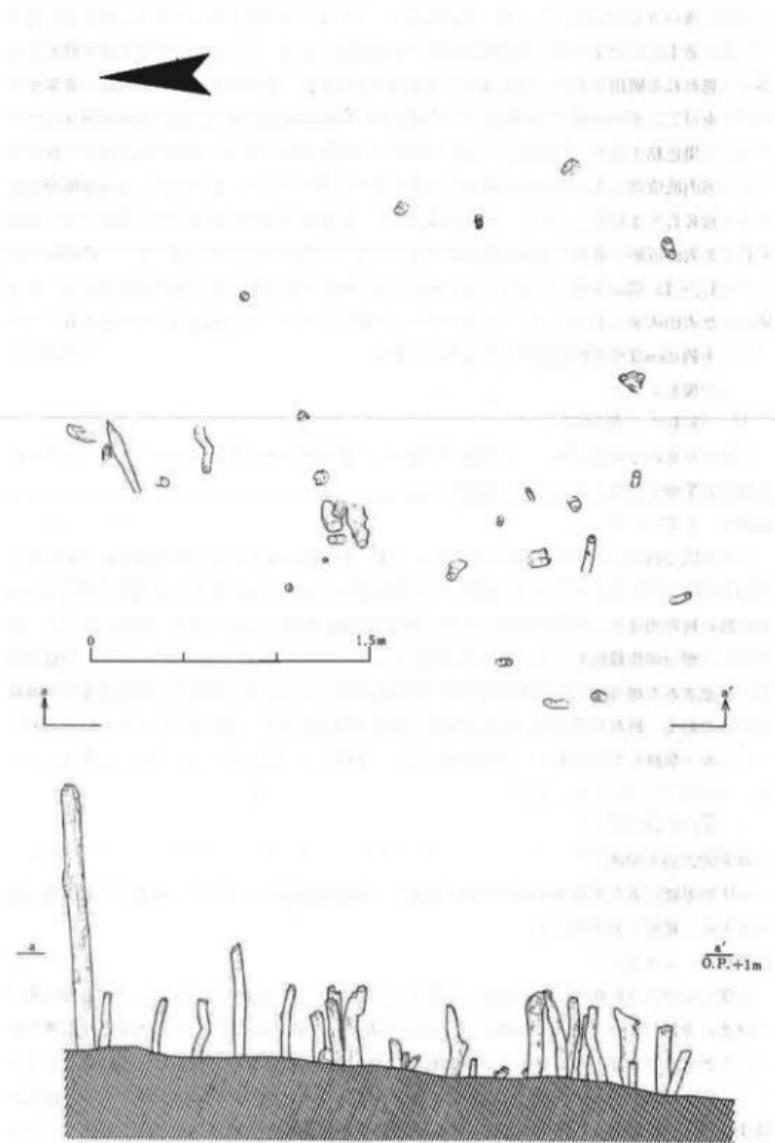
5 B地区の杭列3より西約30mに位置し、5 D-E地区にまたがる。東西幅4mの範囲内に約30本の杭が打ち込まれている。整然とした列は認められないが、ほぼ南北方向に伸びている。最も高い杭の頭は第12層内で検出したが、大部分は第14層内からはじまる。杭は、ほとんど丸杭であるが一部半截杭もある。杭の中には径3~5cmで長さ20~30cmの枝のついたものもある。第16層上面まで達せずに第15A層内で終る杭が數本ある。杭は径5cm以下と10cm前後の2種類の太さがある。杭群の時期は、第15A層内で杭の先端が終るものがあることから、少なくとも第15A層が堆積した後である。第15A層に第I~II様式の土器を含むことから、第II様式より新しい時期のものと考えられる。

5 H地区（第19図）

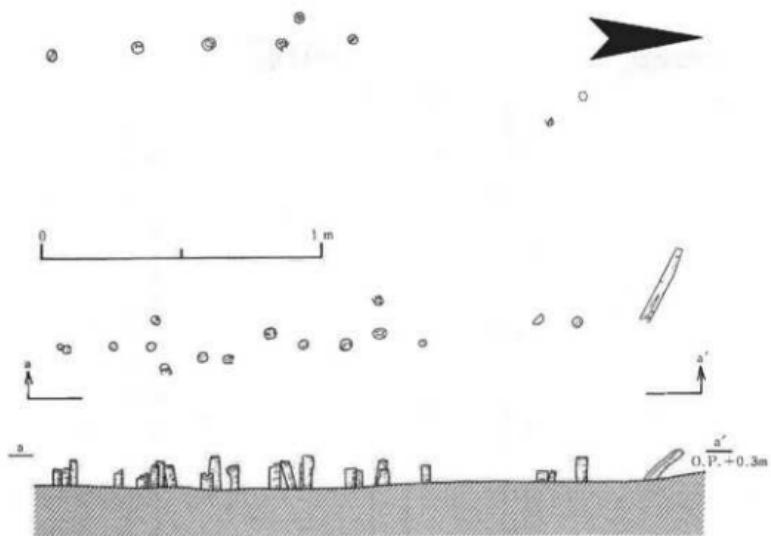
5 H地区は、第5次調査地域の中央に位置し、調査面積は16m²である。検出した遺構は、杭列1ヶ所とピット1ヶ所であった。

杭列5

5 D・E地区の杭群より西約22mに位置する。杭列は一直線に2列並び、南北方向に伸びている。南より2.5mまで杭列は残っているが、北側では認められない。この地点より始まるのか、ぬき取られてなくなったかは不明である。杭の頭は第14B層内で検出し、第16層上面まで5~15cmほどしか残っていない。杭間は、東列約10~20cm、西列が約50cm間隔である。杭列の幅は1.1~1.3mを測る。杭は、径3~5cm前後の丸杭を使用している。第16層上面より、浅いもので10cm前後、深いもので40cmまで杭先が入っている。杭の頭を検出した第14B層からは第II様式の土器が出土している。このことから杭列の時期は第II様式より新しくはならないと考えられる。



第18圖 5 D + E 地區抗群 4



第19図 5H地区杭列5

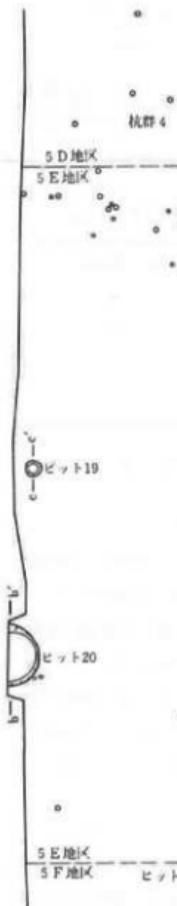
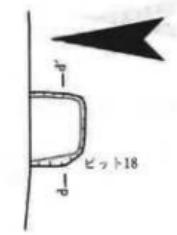
えられる。

5I・J地区（第22図）

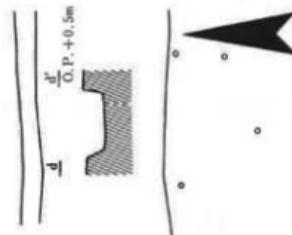
5I・J地区的調査面積は、5I地区が 28m^2 、5J地区が 40m^2 で合計 68m^2 である。検出した遺構は落ち込みと杭群1ヶ所であった。

杭群6

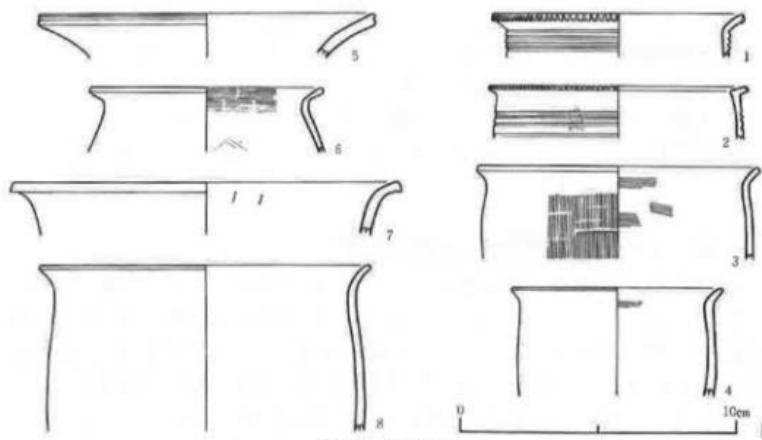
第6次までの調査範囲内では、最も西で検出した遺構である。5H地区の杭列より西約8mに位置する。5H～I地区の間は過去に工事で搅乱されているため、杭列5と杭群6のつながりは不明である。5I～J地区的杭群は、東西10m間で約200本検出した。杭の頭を第12A層内に検出し、その後、第14層、第14層A層、第14B層内でも認めた。杭先端部が第16層上面まで至らずに終るものもあり、複数の時代に打ち込まれたと考えられる。第16層上面で杭群に伴う落ち込み2ヶ所を検出した。北西から南東方向に走る落ち込み1とこれに直行して浅い溝状の落ち込み2がある。落ち込み1は南西肩のみを検出し、北東肩は調査地域外にある。幅が4m以上あり、深さ60cmである。この落ち込み1内に杭群180本が打ち込まれていた。杭は、径5cm前後から15cmをこえるものまであり、長さが2mをこえるものもある。落ち込み2は幅3m、深さ5～10cmを測り、この中に杭約20本が打ち込まれていた。径5cm前後の杭が多い。第12A層～第14B層の各層で杭の頭を認めたことから、杭群が打たれた時期は複数と考えられる。第12A層内で検出した杭は第IV様式以降、第16層上面で落ち込み1・2に伴なって検出した杭は



第20図 5 D ~ F 地区平面図



第21図 5 G ~ H 地区平面図



第23図 出土遺物

第Ⅱ様式のものと考えられる。その中間で検出した杭の時期は不明である。

ピット17~22 (第16・20・21図)

5 A~H地区の約70m間で大小6ヶのピットを検出した。いづれも第16層上面より切り込んでいる。5 A地区で検出したピット17は平面形が橢円形を呈し、二段に落ち込んでいる。長径80cm、短径50cm、深さ35cmを測る。この中から第Ⅱ様式の壺が出土した。5 D地区で検出したピット18は、北側半分は調査地範囲外にあるので不明である。平面形が橢丸方形を呈し、径1m、深さ30cmを測る。この中から第Ⅰ様式の壺と種子(ムクロジ)が出土した。5 D・E地区で検出したピット19・21は、平面形が円形を呈し、径25cm、深さ10~20cmを測る。5 F地区で検出したピット20は、ピット18同様北側半分は調査地範囲外にあるので不明である。平面形は円形を呈し、径90cm、深さ40cmを測り、底が平らである。この中から種子(ヒョウタン・オナモミ)が出土した。特にヒョウタンは果皮と共に多数の種子が出土し、ほぼ一個体分が埋っていたものと思われる。5 H地区で検出したピット22は、西側部分がすでに攪乱を受けており、全形は不明である。推定径1m、深さ10cmの浅い皿状を呈する。ピット19~22内から土器は出土しなかった。ピット内に第15層、第15A層が堆積していることから第Ⅰ~Ⅱ様式の間にこれらは埋まったと考えられる。

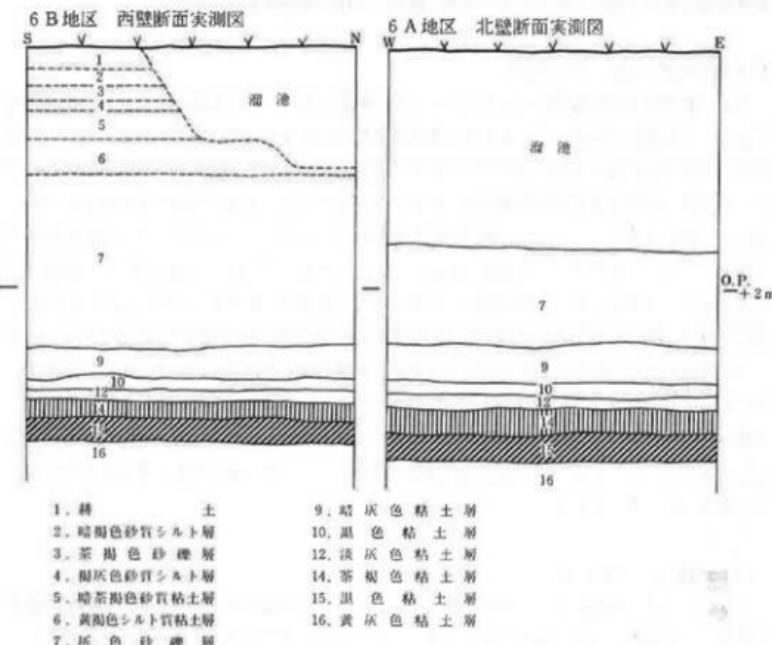
〈出土遺物〉 (第23図-1~8)

1は張りの少ない胴部より口縁部がゆるく外反する。2は張りの少ない胴部より強く口縁部が外反し、頸部内面の境に明瞭な稜がつき、いわゆる逆し字の口縁部である。胴部外面には4条の沈線、口縁端部には刻み目を施す。第Ⅰ様式の壺である。5の頸部は不明であるが、口縁

端部は面をもって終り、1条の沈線を施す。第Ⅰ様式の壹である。3・4・6～8は第Ⅱ様式の壹である。大部分は張りの少ない胴部より口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終るものと面をもつものがある。胴部外面はナデ調整とハケメ調整、内面はナデ調整で終る。6は口径より胴部径がわずかに大きく、口縁部内面をヨコナデの後ハケメ調整する。これらは色調が暗褐色や茶褐色を呈し、胎土に石英、角閃石、雲母などを含む。溝4から7・8、溝6から1～5、ピット17から6が出土した。

4) 第6次の調査概要 (第24・25図)

昭和53年度に実施した第5次の調査地より、さらに西に位置する。恩智川より東10～20mである。東の6A地区は南北4m、東西8m、西の6B地区は南北6m、東西6mである。調査地総面積は70m²である。第6次の調査目的は、第4次・第5次の調査結果を踏まえて鬼虎川遺跡の西限を確認することであった。第6次の調査でも、弥生時代の遺物包含層を検出したが、遺物量は少なかった。主に弥生土器、木製刺突具、自然遺物（種子・軽石）などが出土した。弥生土器は器形や文様などは不明であるが、第4次・第5次の調査から考えると第I～IV様式の時期と考えられる。また、遺構はまったく認められなかった。



第24図 第6次調査地断面図



第25図 ボーリング位置及び試掘調査位置図

現在の溜池によって 6 A 地区全部と 6 B 地区の一部が第 1 ~ 第 7 層まで失なわれている。第 7 層は 6 B 地区で厚さ 2 m あり、6 A 地区では 1.1 m しか残っていない。第 5 次調査地区の第 8 層、第 11 層は 6 A・B 地区では欠層である。第 14 層は厚さ 20 cm。第 15 層は厚さ 30 cm で弥生時代の遺物包含層である。

昭和 52 年度に、第 6 次の調査地よりさらに西で試掘調査を実施した。府水道埋設に伴う試掘は 5 m × 5 m の範囲で 3 ケ所（第 1 ~ 3 トレンチ）おこなった。区画整理事業に伴う試掘は 3 m × 3 m の範囲で 6 ケ所（第 4 ~ 9 トレンチ）おこなった。その結果、第 4 トレンチで弥生時代の遺物包含層を検出した。遺物量は少なかったが縄文晚期船橋系深鉢・弥生土器・木製品が出土した。遺構は認められなかった。他のトレンチでも遺物包含層と同一層と思われるのを認めたが、遺物、遺構は検出できなかった。

これらのことから、鬼虎川遺跡の西限は第 6 次調査地と第 1 トレンチの間と考えられる。また、第 4 トレンチで遺物を検出したことから、遺跡の北西部がこのトレンチまで伸びるか、新たな遺跡が存在する可能性がある。

5) 自然遺物

(1) 動物遺体

a. 出土状況について

第 4 次、第 5 次調査で、遺物包含層およびそれに伴う遺構から発掘された動物遺体の種類を第 2 表～5 表に層別・遺構別にまとめた。産出した動物種の組合せという点では、弥生時代の中の細かい時代分けによる差、あるいは地区・遺構による差はあげられない。しかし、地区による出土量の差は明瞭であって、4 B 区・4 C 区・4 D 区では、大型の骨あるいは完形に近い骨が多量に出土した。それに対し、第 5 次の E 区から西の地域では、出土量が減少するだけでなく小破片が多くなってくる傾向がある。5 A ~ 5 D 区は前 2 者の中間的地域と言える。4 C 地区には、貝片の集積した、小規模な貝塚とも言える場所が見られ、その中に小量の骨片、土器片も混在していた。以上のことから、第 4 次発掘地が、ゴミ捨場あるいはそれに近い地域であって、第 5 次発掘地は、その中心からややはざれた所であったと見ることができるだろう。

b. 弥生時代の動物遺体

産出した種類は、現在までに同定されたもので、哺乳類が 7 種、鳥類が数種、爬虫類 1 種、貝類 7 種、ウニ類 1 種があり、種類は比較的少ない。なおこの他に人骨も出土している。

哺乳類の中では、イノシシ 1 種で全体の出土点数の過半をしめる。シカは 2 番目に多く出土しているが、イノシシと比較してかなり少量である。結局、哺乳類の中で食料として重要なのは、これら 2 種のみであって、他はごくまれな出土である。しかし小型哺乳類の骨は、包含層を水洗節別すれば、かなり増えるだろう。コウベモグラの下顎骨が 1 点発掘されたが、きわめて不味なものであるので、食料とは考えがたい。

大型哺乳類の四肢の長骨は、若い個体のものを除くとほとんど全て打ちこわされているので、

時代 地層・遺跡	弥生時代												
	Ⅱ様式					Ⅲ様式					N	Ⅱ~Ⅳ様式	
	15層	溝 落込 3 4	溝 1	14層	溝 落込 5 2	溝 井戸 1	13層・14層・15層						
動物名	A	B	C	D	E	B	E	A	B	C	D	E	不明
カワウソ													+
イヌ		+						++	++				+
イノシシ	++	+	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
シカ	++	+	++	++	++	++	++	+	+	+	+	+	+
ヒト								++	++	++	++	++	++
鳥類			+					++	++	++			
スッポン	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++			+
サメ類							+				+		
トビエイ類													+
サワラ													+
ボラ								+					
フナ類													+
ナマズ類				+									

■ 非常に多い ++ 多い + 少い *: ガンカモ科の1種

第2表 第4次調査地出土動物遺体（貝類をのぞく）

骨髄食をしたものと思われる。シカの中手骨あるいは中足骨は完形のもの1点の他は骨端のみの破片しか見られなかった。これはヤス等の加工品の原料として利用された結果であろう。発掘品で見るかぎり焼かれた骨は少量であった。また骨壠部等に傷の付けられた骨がかなり見られた。おそらく、肉を骨からほどんど完全にはずしてしまうような解体方法がとられたものと思われる。

これらの哺乳類はカワウソを除くと、すべて現在北摂山地で見られるものであり、当時は生駒山地にも分布していたと考えてさしつかえないだろう。カワウソは、大阪市の森の宮貝塚あるいは、八尾市亀井遺跡から発見例があり、弥生時代の河内潟あるいは河内湖に生息したことは明らかである。おそらく、獵は遺跡周辺の、あまり広くない地域で行われたのであろう。

鳥類の遺体はガンカモ科の1種をはじめ数種類あると思われるが、未同定である。上腕骨と尺骨に、かなり巨大なものが見られる。これは、サギ類あるいはそれより、大型の鳥の遺骨と思われる。

爬虫類ではスッポンのみが出土した。頭骨、歯骨（下顎骨の1部）各2点をはじめ、背甲板が多数出土しているので、かなり捕獲していたようである。スッポンが手に入りやすかったこ

時 代 <small>古式 半山 中期</small>	地層 ・遺構 <small>層 層 層</small>	弥生時代											古墳時代 <small>古 新</small>		
		II 様式					III 様式			II~IV 様式					
		16 溝	15 層	15 A 層	14 B 層	14A 層	14 層	A B G	A B C D E F G H I	不明	C D E C				
動物名	H	B	C D E F G H	H	F G H	A B G	A B C D E F G H I	不明	C D E C						
コウベモグラ					+										
ネズミ科						+	+	*		++					
ノウサギ										+					
イヌ			+		++	+	+	+	+	+					
イノシシ			+++	+++		+++	+++	+++	+++	+++					
シカ				++	++	++	++	++	++	++					
ウシ												++			
ウマ												+++			
ヒト						+	+			+					
鳥類	++	+		+	+		+	+++++	+						
スッポン					+++	+	+++	+++	+++	+					
カエル類										+					
サメ類			+							+					
スズキ										+					
コイ									++						
ウニ類										+					

++ 多い + 少ない * ドブネズミ

第3表 第5次調査地出土動物遺体（貝類をのぞく）

とから、当時、遺跡付近には沼地が広がっていたと考えられる。

先述のように包含層の水洗篩別を行っていないので、魚骨も、まだ十分に集められていない。現在までに得られた試料ではコイが比較的多い。スズキとボラは淡水域にも入ることが多く淡水魚に含めることもできる。つまり全体として、淡水魚の出土量が多く、主な漁場は、遺跡のすぐ西に広がっていた河内湖であったと思われる。サメの遺体はすべて脊椎骨で中央部に穴があけられている。

貝類は非常に保存状態が悪い。海産貝はアカニシとヘナタリを除いて、すべて貝殻が溶けてしまっていて、内型のみが保存されていたため同定不可能であった。淡水貝もすべて殻皮か内型を残すのみとなっていた。保存されているかぎりでは、全域にわたり、シジミ類が多く、次に多産するアカニシは4C地区の「小貝塚」より多産している。

(2) 昆虫遺体

第5次発掘によって鬼虎川遺跡から可成りの昆虫遺体が発見された。概査の結果を第6表にしめす。

時代 地層・遺構 貝類名	弥生時代												
	II様式				III様式		II~IV様式						
	溝 6 層	15 層	15 A 層	溝 4 層	14 B 層	14 A 層	14 層	13層~15層					
B	A	F	B	H	F	A	A	B	D	E	F	G	I
シジミ類	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+	
イシガイ	+?								+	+	?		
マツカサガイ											+		
タニシ類	+			+			+				+		
ヘナタリ									+	+			
アカニシ	+	+				+	+				+		
海棲不明種	+							+		+			

+ 多い + 少ない

第5表 第5次調査地出土貝類遺体

時代 地層・遺構 貝類名	弥生Ⅲ様式				
	14層				「貝塚」
	A	B	C	D	
シジミ類	+	+	+	+	
イシガイ			+?	+?	+
タニシ				+	
アカニシ			+	+	

++ 多い ++ 少ない

第4表 第4次調査地出土貝類遺体

1. 発掘点数は計37点に達した。この量はとくに多くもないし、少くもない数字と思われる。
2. 時代は主として弥生時代中期である。とくに集中して発見された地区や地層はみあたらなかった。これは1の指摘と3・4の特徴と関係して堆積状況にひとつの資料を提供するものであろう。
3. 発見されたのはすべて鞘翅目（甲虫）で、他の昆虫群は見出されなかった。キチン化がよく腐敗、破断等に抵抗力のある虫体のみが発見されたことになる。
4. 歩行虫類とくにゴミムシ科の出土数が少く、コガネムシ科や食葉性（樹木食）の甲虫、水生甲虫、糞食、糞食性甲虫などどの群も平均的に出土している。
5. 多くの種は森林的環境に結びついて生活するものである。
6. したがって、これだけの資料で大胆に推定すれば、弥生時代中期の発掘地域は、森林が近

生 活 型	種 名	地 層 層 地 区	弥 生 時 代										計				
			Ⅲ 様 式		Ⅳ		Ⅱ 様 式～Ⅳ 様 式										
			15 層	14 層	14 層	13 層	15層～13層										
B	F	A	B	D	A	D	A	B	C	D	G	J	K	L	?		
歩行虫	オオオサムシ <i>Ohomopterus dehaani</i> オオトックリゴミムシ <i>Oodes vicarius</i> オオゴミムシ？ <i>Lesticus magnus</i> ? ゴミムシ科小型種 HARPALIDAE		1									1	1	1			
水生甲虫	クロゲンゴロウ？ <i>Cybister</i> ? sp. ゲンゴロウモドキ？ <i>Dytiscus</i> ? sp. オオガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i>				1						1	1	1	1			
糞食 糞食	オニヒラタシデムシ <i>Thanatophilus a ubrugosus</i> センチコガネ <i>Geotrupes aevistriatus</i>									1		1	1	1			
食葉性 甲虫	ナミコガネ？ <i>Mimela splendens</i> ? ハンノビメコガネ？ <i>Anomala multistrigata</i> ? サクラコガネ？ <i>Anomala daimiana</i> ? コガネムシ科(複数種) SCARABAEIDAE ミドリカミキリ <i>Leontium viride</i> ハムシ科？(複数種) CHRYSOMELIDAE ?		2	1	1		1	1	2	1	1	1	6	5			
その他	所轄不明種									1	2	5	8				
	計		1	1	2	1	1	3	2	1	5	1	5	2	2	6	37

第6表 第5次調査地出土昆虫遺体（すべて甲虫）

く、そこから消流によって自然遺物が運搬され、堆積するような環境にあった。遺跡としては清潔な印象を受ける。

7. 特記すべき種は見当らなかったが、オオガムシをのぞき種まで同定できた5種はいずれも遺跡から初出土例となる。
8. オオオサムシの発見は遺跡の堆積環境について重要な知見であった（後述）。

種レベルまで同定できた遺体の性格を以下に列記する。

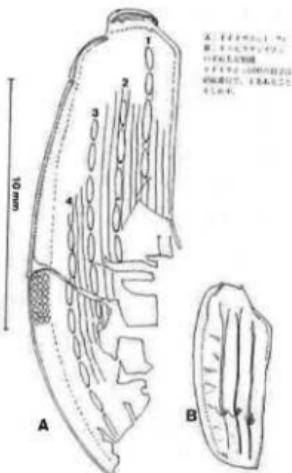
オオオサムシ *Ohomopterus dehaani* 5B地区北壁の第15層（黒色粘土層）から1978年4月15日発見された遺体は本種の左鞘翅と同定された。

長さ約20mm、幅約6mm、発掘当時には藍青色光沢があり、丸2年を経た現在も凹部には紫色をとどめている。先端は欠如し、後半の会合部より多くは堆積時の条件によって波状の変形をうけているが、“triploide, homodyname”の構造はよくみとめられ、かつ第1次間室の鎖線は明



第26図 オオオサムシの分布
大阪周辺におけるオオオサムシの分布と鬼虎川遺跡の位置
（×印）。二つの矢印はそれぞれ淀川と大和川を示す。
斜線をほどこしたのは生駒・信貴山地および矢田丘陵、
枚方丘陵で。ここにはオオオサムシは棲息しない。

第26図 オオオサムシの分布



第27図 第5次調査地出土
昆虫遺体図

瞭に4条がみとめられる。鎖状顆粒の後端には孔点がみとめられる（第27図）。外縁丘孔点列部の広さから辛と思われる。

大きさ、色彩および4条の鎖線をもつことから、オオオサムシであることは疑う余地がない。本種の発見は包含層堆積時の古水流について重要な意味をもつ。何故ならオオオサムシの現在の分布は第26図のようであり、生駒・信貴山地、矢田丘陵、枚方丘陵、および大阪平野には全く棲息しないからである。遺跡のすぐ東方にそびえ、おそらく大量の自然遺物の供給源であったと考えられる生駒山地に現在オオオサムシが棲息せず、鬼虎川遺跡で発見された機構は次のいずれかであろう。

A. 弥生時代から現在にいたるまでオオオサムシは生駒山地に棲息し、したがって遺体は生駒山地由来のものであるが、調査不足のため棲息が確認されていないだけのことである。

B. 遺体が堆積した弥生時代までは生駒山地にオオオサムシは棲息したのであるが、その後何らかの理由によって絶滅し、現在棲息をみない。

C. 過去から現在までオオオサムシは生駒・信貴山地には棲息せず、したがって鬼虎川遺跡で発見された遺体は当時の淀川もしくは大和川の水流によって運搬され、ここに沈積したものである。

日浦は1961年から近畿地方のオサムシ類の分布調査を行い、最近ではこの調査が近畿オサムシ研究グループ（6名）にひきつがれ、その結果は1979年にまとめられた第26図のプロットの

ように、大阪周辺では他地に例をみない克明な分布図が完成している。この経験からAのケースは否定される。また同グループのメンバーである春沢圭太郎氏は大学卒業論文のために枚岡公園一帯で九二年間オサムシの生態調査を行い、同地を中心とした森林がオサムシ類の棲息に現在なお好適である結論を得ている。したがってBのケースも否定される。

結局、弥生時代中期の鬼虎川には、東方の生駒山地西斜面から堆積物が供給された以外に、たとえその量はわずかであっても、旧淀川もしくは旧大和川の水流によって軽量の自然遺物が流入し堆積される古地理的条件があった、と結論せざるを得ない。

なお、オオオサムシは後翅が退化して飛ぶことができない甲虫で、西南日本に斑点状に分布する。*ミドリカミキリ* *Leontium viride* 5F地区北壁の第14A層（茶褐色粘土層）より、1978年4月11日に発見された。

直径20mm、長さ70mmほどの木片（枝）の折れ口に金緑色の甲虫が埋れる状態で見つかった。検した時点では頭、胸部が失われていたが、左右の鞘翅がのこっており、その形状からミドリカミキリと同定できた。枝の基部に縦に円筒状の穴があり、その中に後半身が埋れているところからこの虫は枝を食害・成長して羽化したが、自らのトンネルより脱出することなく死亡し、枝とともに土中に埋れたと考えられる。

本種は日本全土、樺太、南千島、朝鮮、中国に分布し、モミ、アカマツ、スギ、アラカシ、ウラジロガシ、コナラ、クヌギ、クリ、シイ、クスノキ、タブノキ、イスノキ、ヤマハゼ、サカキ、ミズキなどの多様な木の枯れ木を食害する。樹種よりも木の状態（枯れた）を選ぶので古環境の堆定には役立たない。しかし、このような食樹内で羽化した状態で発見されたという出土例として興味深い。

オニヒラタシデムシ *Thanatophilus subrugosus* ♀左鞘翅（第27図）5D地区の包含層（黒色粘土層）、1978年3月1日検出。

発見地点では青藍色の光沢が目立ったが、これは鞘翅の裏面であって、室内で土層より分離したところ、表面は暗褐色で無光沢、もし表面が露出していたのなら見逃されていたかもしれない幸運な発見例である。一面に粗大点刻があり、3条の鋭いキールが平行して走る点から *Thanatophilus* 属と同定された。この属には他にヒメヒラタシデムシ *T. auripilosus* があり、現在の大阪平野ではこの種の方が普遍的に棲息する。しかし *auripilosus* ではオス・メス共に最内方のキールは翅端に達するが、遺体は外縁の寸前で終っている。オニヒラタシデムシのオスではこの特徴をもち、かつ全体に弱い波打ち構造がある。この点で遺体は後者と考えられる。

本種はどちらかといえば山地性で、現在の大坂では金剛山や岩湧山に棲息するが、なお淀川や大阪市阿倍野でも記録がある。腐敗した動物質に集まり、塵芥捨場などに見られる。本種の遺体の発見は、自然状態での動物の屍体も当然のことながら、人類の居住地が近かった可能性をしめすものである。

センチコガネ *Geotrupes laevistriatus* 5B地区包含層（黒色粘土層）、1978年2月8日検出。

2片に分かれ、夫々にひび割れがあり、かなり破損しているが、つなぎ合わせると凸隆した右鞘翅であると判断された。おしつぶした状態での推定全長は12mmと可成り大きく、半円形で、

表面に約12条の平行して走る溝があり、溝には大形の点刻をともない、間室は平滑、前縁（基縁）は直線状でかつ内縁と直交し、肩部は強く膨隆し、膨隆部には溝を欠いて平滑であること。および外縁の形状から *Geotrupes* と判断した。この属には他にオオセンチコガネ *G. auratus* があって現在の箕面等に棲息している。しかし遺体は青緑色の光沢をもち、条溝内の点刻が大きい点からセンチコガネと同定される。

本種は森林に棲み、獸糞に飛来して糞の下や近くの地面に穴を掘って糞を貯え、幼虫の餌とする習性がある。遺体としての出土例は今回が最初である。

オオガムシ *Hydrophilus acuminatus* 1977年9月28日に弥生時代の遺物包含層から発見された。

伊丹市原田遺跡、八尾市龜井遺跡でも発見されており、清流ないし清潔な止水の存在を指示する種である。

オオトクリゴミムシ *Oodes vicarius* 5 L 地区包含層、1978年5月25日検出。前胸背。

なめらかに前方へ狭まり一様に細い縁取りのある外縁、中央の浅い縱溝、わずかに後方へはり出す後角の形状からトクリゴミムシ属（ゴミムシ科、アオゴミムシ亞科）と判断した。この属には他にオオヒラタトクリゴミムシ、コトクリゴミムシ、トクリゴミムシ、ヤマトトクリゴミムシがあるが、大きさと後角のはり出しの形状で区別された。

本種は本州・四国・九州に分布し、水辺に生活するものである。

(3) 植物遺体

第4次および第5次発掘の折に採集された植物遺体、および第5次発掘に伴って実施された花粉分析の試料から検出された植物遺体（表中に＊で示す）は、第7表および第8表に示す。発掘時に採集されたものは大型のもののみであり、しかも土壤試料からの洗い出し作業がまだ終了していないため、表に示したものは種類数も少く、また、構成に著しいかたよりがみられるが、産出部位および主要な産出状況は下記のとおりである。

裸子植物

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. 球果。

クロマツ *P. thunbergii* Parlat. 球果。

カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. 種子。

被子植物

木本性双子葉植物

ヤナギ属 *Salix* sp. 棱の虫害

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 果核；5 D 地区第14層から出土したものは人為的に打ち割られている。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 葉、堅果、および炭化した子葉。

アラカシ *Q. glauca* Thunb. 堅果。

カシ類（アカガシ亜属）*Quercus* (*Cyclobalanopsis*) sp. 堅果、殼斗および炭化した子葉。

時代 地層・ 造構 植物名	弥生時代										
	Ⅱ様式				Ⅱ～Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ～Ⅳ様式				
	溝 3	ビット 3	第15層	溝 1	ビット 15	溝 2	第13層～第15層				
B	F	C	B	A	E	B	D/E	D	B	A	?
イチイガシ	+	+									
ナラ類						+					
トチノキ								+			
モモ							+				
ブドウ属										+	
シリブトビシ	+	+	+	+	+	+	+	+			
ヒシ属	+							+			
ウリ類	+	+	+					+			
ヒヨウタン	+			+	+	+	+	+			
オナモミ									+		
イ 炭化稻束 炭化玄米 未炭化稻穀片					+					+	

卅 非常に多い 卌 多い 十少い

第7表 第4次調査地出土植物遺体

ナラ類 (コナラ亜属) *Quercus (Lepidobalanus)* sp. 堅果および殼斗。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 堅果破片。

モモ *Prunus persica* Sieb. et Zucc. 果核; 中型のものが多いが、小型のものや、やや大型のものもある。いずれも表面の彫紋は浅い。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 堅果および外果皮。堅果は5F地区から産出したもののうちの1例のみがほぼ完形であるが他はすべて破片。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 果実。

ヤツツバキ *Camellia japonica* Linn. 種子および未熟な果実。

ブドウ属 *Vitis* sp. 種子。

草本性双子葉植物

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子。

サナエタデ *Polygonum scabrum* Moench 葉鞘を有する茎および種子。

タデ属 *Polygonum* sp. 種子。

イスビュ *Amaranthus lividus* Linn. 種子。

時代	弥生時代										?	古墳～奈良時代											
	I~II	III	様式	IV	II~IV様式																		
地層・遺構	ビット18	15 層	14 層	14 層	13	13層～15層						12 層	10 層	8層	7層								
植物名	D	F	D	C	F	G	B	C	D	H	C	A	B	E	F	H	I	I	?	C	C	C	?
裸子植物	アカマツ											+											
木本性双子葉植物	クロマツ											+											
	カヤ											+											
ヤナギ属			++									+											
オニグルミ					+							+	+										
イチイガシ																							
アラカシ																							
他のかしき類			++									+											
クモモ																							
トチノキ			++				+					++											
ムクロジ	+				+																		
ヤブツバキ					+																		
ブドウ属																			+				
草本性双子葉植物	カナムグラ		+																				
	サンエタデ											+											
他のかたで属																							
イスビユ																							
ハコベ属																							
オニバス																							
シリブトビシ			++				+					++											
ヒシ属								++															
ウリ類	マクワウリ								+														
	シロウリ?																						
	キュウリ?																						
ヒヨウタン									++														
オナモミ									+														
タカサゴロウ											+												
オモダカ											+												
ヨシ?			+																				
糞化稻東												++											
イネ	糞化玄米											+											
	穢盤破片											++											
	糞化穢盤破片											+											
カヤツリグサ科																							
コナギ																							
その他	コケ植物											+											
	サルノコシカケ科																						

* 非常に多い + 多い + 少い

* 花粉分析試料中より得られたもの。他はすべて発掘時に採集されたもの。

第8表 第5次調査地出土植物遺体

ハコベ属 <i>Stellaria</i> sp.	種子。
オニバス <i>Euryale ferox</i> Salisb.	種子。
シリブトビシ <i>Trapa macropoda</i> Miki	果実; 5 F 地区第14A層から出土した多數の 破片のうちには、割られたあと焼かれたと思 われる焼け焦げのみられるものがある。
ヒシ属 <i>Trapa</i> sp.	果実破片および刺針先端部; 4 B 地区溝3から 出土したものはヒシ <i>T. japonica</i> Flerov であろ うと思われるが破片のため種名を決定できな い。種子; 比較用現生標本と比較すると弥生時代 のものはほとんどがマクワウリの特徴に一致 する。ただし 5 C 地区第8層から出土した多 數の種子はシロウリ <i>C. melo</i> var. <i>conomon</i> Makino に酷似し、キュウリ <i>C. sativus</i> Linn. に酷似する種子も含まれる。しかし、ウリ類を 種子の形態のみから識別するのはきわめて困 難であり、表2に示した各々の和名は原植物 を正確に表現するものではない。
ウリ類 <i>Cucumis melo</i> Linn.	種子; 比較用現生標本と比較すると弥生時代 のものはほとんどがマクワウリの特徴に一致 する。ただし 5 C 地区第8層から出土した多 數の種子はシロウリ <i>C. melo</i> var. <i>conomon</i> Makino に酷似し、キュウリ <i>C. sativus</i> Linn. に酷似する種子も含まれる。しかし、ウリ類を 種子の形態のみから識別するのはきわめて困 難であり、表2に示した各々の和名は原植物 を正確に表現するものではない。
ヒヨウタン <i>Lagenaria leucantha</i> Rosby.	種子および果皮破片; 4 D/E 地区の溝2から は多數の種子が、また 5 F 地区ピット20から は多數の種子と共に碎けた果皮が出土した。 5 D 地区の15A層および 5 B 地区の包含層か らは果皮の頂部破片が出土した。
オナモミ <i>Xanthium strumarium</i> Linn.	果実。
タカサゴロウ <i>Eclipta prostrata</i> (Linn.) Linn.	種子。
單子葉植物	
オモダカ <i>Sagittaria trifolia</i> Linn.	種子。
ヨシ <i>Phragmites cf. communis</i> Trin.	稈および匍匐茎。
イネ <i>Oryza sativa</i> Linn.	4 E 地区溝1、5 B および 5 C 地区の第14A 層、および 5 I 地区の包含層からは炭化した 稻束と思われるものが出土した。炭化した玄 米を内包する炭化穀殻が一定方向に配列し、 穎および小穗軸が残存する。護穎および内穎 には多數の長毛(穂)がある。ノゲは有毛で、 すくなくとも護穎よりは長い。稻束の内部に は未炭化部分が残存する。4 E 地区溝1の未 炭化穀殻片は炭化稻束に由来するものである。

カヤツリグサ科 Cyperaceae

種子。

コナギ *Monochoria vaginalis* (Burm. fil.) Presl. var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub.

種子。

以上の植物のうち、直接食用となるものはカヤ、オニグルミ、イチイガシ、クリ、モモ、ブドウ属、ハコベ属、オニバス、シリブトビシ、ヒシ属(ヒシ?)、ウリ類、ヒョウタン、イネ、コナギなどで、アラカシのようなカシ類やナラ類、トチノキはアク抜き後食用となし得る。また、ムクロジは食用となるほかサボニンを含むため石けんの代用品として使われる。

カナムグラ、サナエタデ、イヌビユ、ハコベ、オナモミ、タカサブロウ、コナギなどは前川文夫氏のいう「史前帰化植物」(前川、1943)である。

鬼虎川遺跡の植物遺体群のうちで最も注目に値するのは第4次および第5次発掘を通じて4地点から発見された炭化稲束である。単なる偶発的事件で焼けたのかも知れないが、たとえば保存のための一方法として目的意識的に焼成された可能性もあり、今後さらに検討する必要がある。

(4) 花粉

第13層から第15A層に至る弥生時代遺物包含層では、いずれの層でもアカガシ亞属Cyclobalanopsisが優占し、55~63%に達する。イスマキ属Podocarpus、シイノキ属—マテバシイ属Castanopsis—Pasania、ヤマモモ属Myricaなどのような照葉樹林を構成する樹種の花粉やモミ属Abies、ツガ属Tsuga、コウヤマキSciadopitys、スギCryptomeria、ヒノキ科Cupressaceaeなどの針葉樹花粉、コナラ亞属Lepidobalanus、ニレ属Ulmus、ケヤキZelkova、クマシテ属Carpinus、カエデ属Acer、ブナ属Fagus、などの落葉樹花粉などを伴う。いずれも数パーセント以下であるが、上位の13層にむかってスギ、ヒノキ科、コナラ亞属などが増加する傾向が見られる。しかし二葉松類Pinus;Diploxyylonは著しく低率で、いずれも2パーセント以下であり、ニレ属—ケヤキ、エノキームクノキCeltis—Aphanantheなどの二次林要素も著しく少ない。

草本花粉はほとんどがイネ科Gramineaeとカヤツリグサ科Cyperaceaeで、上位へ向って増加するがあまり多くはなく、第13層では両科をあわせて花粉総数の約18パーセントである。この中にはイネOryzaのものと思われる花粉も含まれるが、花粉総数の10パーセント以下である。ガマ属Typha、オモダカ属Sagittaria、イボクサ属Aneilema、コナギ*Monochoria vaginalis* var. *plantaginea*、サンショウウモ~~Salvinia~~、ミズワラビ~~Ceratoptaris~~など、水湿地の植物の花粉や胞子が伴われるが、陸上の荒れ地や畑地にみられるような植物の花粉は極めて少い。

以上のような花粉構成から考えると、鬼虎川遺跡周辺は弥生時代の中後半の時期に至るまで、稠密な照葉樹林におおわれ、森林破壊はほとんど行なわれていなかった事になる。このような状況は第8層に至ってもなお維持されているが第8層ではスギがコウヤマキやヒノキ科を伴って著しく増加する。二葉松類もやや増加して約10パーセントに達するが、まだ二次林成立にまでは至っていない。

第4章 まとめ

第4次～第6次にわたる調査対象地は、結果的に鬼虎川遺跡の西範囲に、細長くトレンチを設定したかのようになった。その結果、遺跡の範囲、時期などについては広い目で把握することができたが、調査域の制約などのため各々の遺構を追跡して調査できず、遺構の性格、および遺跡の実体については充分に明らかにできなかった。ここでは、検出された遺構、遺物を列記して簡単にまとめておきたい。

1) 遺構について

三年度にわたる調査の結果、弥生時代前期～中期にかけての遺構が検出され、少なくとも2時期の生活面が確認された。前期の生活面は、第16層上面（鬼虎川遺跡での地山面）で検出され、4F地区でO.P.+15m、5I地区でO.P.+0.1m、6地区でO.P.+0.1mを側る。中期の生活面は、西へゆるく傾斜し、4F地区と5I地区で1.4mの差が認められた。5I地区で最も低く0.1mを保つ。

この地形を考慮に入れながら、明らかに第16層上面から切り込んだ遺構、あるいは遺構内から前期に属すると判断された遺物を出土した遺構を選ぶと、4E地区の溝1、4A地区的溝3とこれに伴う杭群、5A地区溝6と溝に並行して打ち込まれた杭列3、5H地区杭列、5I地区溝、及びピット17～22などが前期に属する。このことから、前期の遺構は、当時の地形面が比較的低い4A・5A～5I地区に溝・杭列を中心として集中してつくられ始めたことがわかる。

中期の遺構面は第15層上面で検出された。ただし、第4次調査では層位区分ができなかったために、遺構内出土の遺物を規準に時期決定を行なった。中期になってあらたにつくられた遺構には、井戸1、溝2、杭群1、ピット3・8があり、4D地区以東に主として集中している。

遺構の中には前期から中期まで継続的に利用されたと考えられる例がある。4A地区的杭群3では、杭頭が第15層の中・下部で終る杭にまじって、打ち込まれた杭の先端が地山面（第16層上面）まで達していないもののが存在する。同様のことが杭群4・6などにも観察される。また逆に前期及至中期前半で明らかに造営されてしまう遺構に5H地区の杭列5、5A地区溝6、杭列3などがある。これらのことから、杭群3・4・6のように地形的に低い位置に形成された遺構は、各々前期以降中期まで順次杭を打ち込んで補充していたことがわかる。また中期になると地形的に微高地状を呈する4D地区以東へ遺跡が拡大することもあきらかになった。

2) 鬼虎川遺跡の範囲

今回の調査範囲では、鬼虎川遺跡の西限を確認することができた。すなわち、5I地区で検出した杭群6と落ち込み1・2が西端の遺構であり、この遺構より以西、第6次調査の範囲を含めて遺構は検出されなかった。

遺跡の東への広がりは、4F地区が今回の調査対象地の東端にあたるが、第3章2で述べ

たように、さらに東へ広がる不能性が考えられる。事実4F地区の東約250mの地点で、土木工事中に弥生土器（畿内第Ⅲ様式）が採集されており、この付近にまで遺跡が広がる可能性が高い。これらのことから、遺跡は東西約400mの範囲に広がると思われる。遺跡の南北の広がりは、今回の調査域では確認できなかったが、周辺の発掘調査で徐々にあきらかになってきている。昭和52年に国道170号線と308号線の交差点より北へ約40mの地点で試掘調査を実施したが、弥生時代の遺構、遺物は検出されなかったので、一応この地点の手前で遺跡の北限とすることができる。南への広がりは、現在までのところ全て不明であるが、昭和38年の水道管敷工事中に木管の底板が採集された地点を一応南限と考えておきたい。そうすると、南北の広がりは少なくとも300mの範囲以上であると考えられる。鬼虎川遺跡は、少なくとも東西約400m、南北約300mの範囲に広がる大遺跡であると思われる。

3) 自然環境

今回の発掘地域においては弥生時代の遺物包含層（第13層～第15層）はもとより、その上下の地層も静かな池沼の堆積相を示すものが主体をなす。イネ科やカヤツリグサ科の花粉が多く、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、コナギ、サンショウモ、ミズワラビなど水湿地に生育する植物の花粉や胞子が伴なわれることから、この水域はかなり浅かったことが推定される。また、オオガムシの遺体が産出していることから、この浅い沼が清澄な水によって満されており、しばしば他の遺跡で知られるようなドブ池のように汚い水域ではなかった事が推定される。

脊椎動物の遺体としては、コイその他の淡水魚が非常に多く、スッポンやガンカモ類が伴なわれるため、水域は淡水でみたされてると推定されるが、ときにはスズキやボラがさかのぼることもあったであろう。アカニシがシジミに次いで多く出土しており、まれにヘナタリや加工されたサメの脊椎骨も出土しているが、これら海産の魚貝類は大阪湾岸から搬入されたものと思われる。なお、オオサムシの出土によって、大和川または淀川からの流入が推定されているが、今後さらに検討を要する問題である。

上述のような古環境は、水稻耕作にとっても好適な条件であり、出土遺物から推定される稻作農耕に必要な環境条件を満している。即ち、河内潟（鶴山・市原、1972）の縁辺に広がる浅い低湿地が水稻耕作の場として開拓されたのである。低湿地農耕の産物としてのイネ（炭化稻束など）の他、ウリ類やヒョウタンのような畑作果菜類や畑によくみられる雑草のカナムグラ、サナエタデ、イヌビユ、ハコベ、オナモミ、タカサゴロウなどの遺体も出土している。しかし弥生時代の遺物包含層からは、ヒョウタン以外はきわめて少い。花粉群構成においても畑作植物およびその隨伴雑草の花粉はきわめて少く、ほとんどは照葉樹林を構成する植物の花粉である。この事は遺跡周辺の植生破壊がまだあまり進行しておらず、後背の生駒山地とともに稠密な照葉樹林で覆われていた事を示すとともに、ヒョウタンやウリ類のような果菜類が集落内またはその周囲の限られた範囲内で栽培され、大規模な畑作農耕が行なわれていなかった事を暗示している。いっぽう、哺乳動物の遺体としてはイノシシが多産し、シカが伴出している。これらは現在の生駒山系には分布しておらず、北摂山地における現在の生息状況に類似してい

る。森林的環境に結びついて生活する鞘翅目（甲虫）の昆虫遺体が多いことによっても裏づけられる、弥生時代の生駒山地を覆っていた照葉樹を主とする森林がイノシシやシカの生息を保證していたのである。

4) 当時の生活

鬼虎川遺跡に関する今回の発掘調査では考古遺物のみならず、自然遺物もきわめて多量に検出された。それらの遺物は弥生土器や石器はもとより木器、骨角器にいたるまで保存状態がきわめて良好である。出土遺物の中で最も注目されるのは炭化した多数の稲穂の束と、広鉗、又鉤、鋤、杵、石包丁などである。これらは稻作が行なわれていたことを推測させるに充分な資料であり、古環境や伴出する史前帰化植物をあわせ考えると水稻耕作であったと考えられる。第16層の上面で検出された溝や杭列など、前期の遺構が地形的に最も低い所に存在することは、鬼虎川の農耕集落が弥生時代前期にはすでに河内平野の低湿地に進出した事を示している。この低湿地での活動が農耕季のみの季節的活動ではなかった事は、発掘地域内から鉢や石包丁の様な農耕具の未製品や、サスカイトの剥片などが多數出土している事から明らかである。農作物としては他にヒョウタンやウリ類が出土しているが、出土例が少ない事と周辺の植生破壊があまり進行していない事を考えると、畑作農耕はあまり行なわれていなかったと思われる。

当遺跡からはイノシシの遺体も多産し、シカやカワウソなども伴なわれる。石鉢、石槍、石小刀、石鎌、弓、弓はずなど狩猟に関係する石器や骨角器、木器など多く出土しており、当時の人々の生活にとって狩猟がなかなか重要な役割をはたしていた事がうかがえる。しかし、河内湖を前面にひかえた立地条件にありながら魚貝類は出土量も少なく、漁獲用具もきわめて少ない。ただし、アカニシやサメのような海産物を探集か交換かは別として、少くとも入手し得る状況にあったと言えよう。

5) 縄文時代以前の古環境

いわゆる地山層である第16層が形成される以前には、鬼虎川遺跡周辺は河内湾（梶山・市原、1972）の海面下に没していた。従って、発掘地域内には縄文時代の遺構は存在しない。海成粘土層を堆積した河内湾の最末期は、ミドリシャミセンガイを多産するシルト質細砂層によって示される。この地層は河内湾に流入した土砂が沿岸流によって湾岸沿いに運搬されて堆積したものではないかと思われる。その年代は¹⁴C年代によると約5000年前ということになる。

河内湾に堆積した沖積層の下位には埋没黒ボク土を有する低位段丘が埋没している。この黒ボク土の中または直下に挟在するKL-2火山灰層は、吉川周作氏（大阪市立大学）によると既知の火山層のうちでは、平安神宮火山灰層（池田・石田、1972）に、また沖積海成粘土層の下部に挟在するKA火山灰層は、深泥池上位火山灰層（深泥池団体研究グループ、1976）に岩石学的特徴が一致するとの事であるから、埋没黒ボク土の形成期は最終氷期の後期に相当する。従って地表下11mから15mの深さ（O.P.-5～9mに存在する低位段丘面上には、後期旧石器時代から中石器時代にかけての遺物・遺構が埋没している可能性がある。

図版



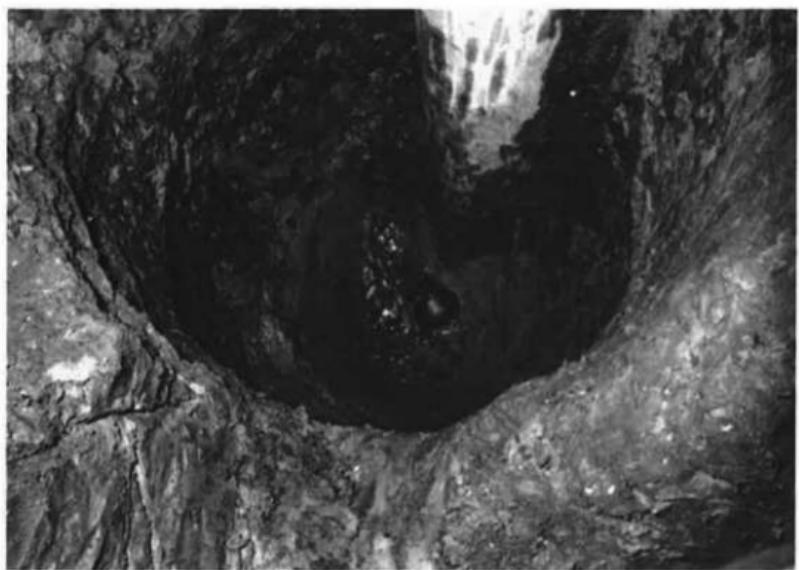
1. 鬼虎川遺跡周辺



2. 第4次調査地近景



1. 溝2



2. 井戸1



1. 杖群 1



2. 杖群 1



1. 枕群 2



2. 遺物出土状況



3. 遺物出土状況



1. 杠群 2



2. 杠群 2



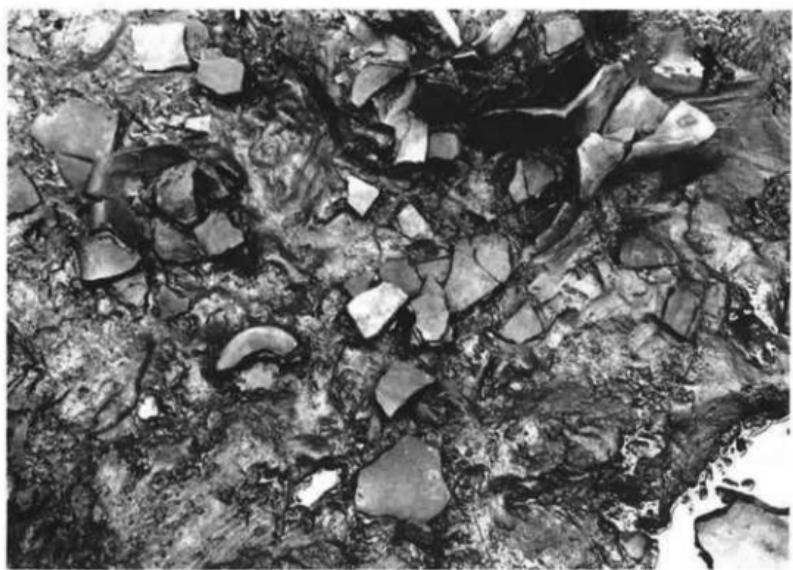
1. ピット15



2. ピット14



1. 須恵器・土師器出土状況



2. 弥生土器出土状況



1. 4B 地區 鋤出土狀況



2. 4D 地區 丸頭出土狀況



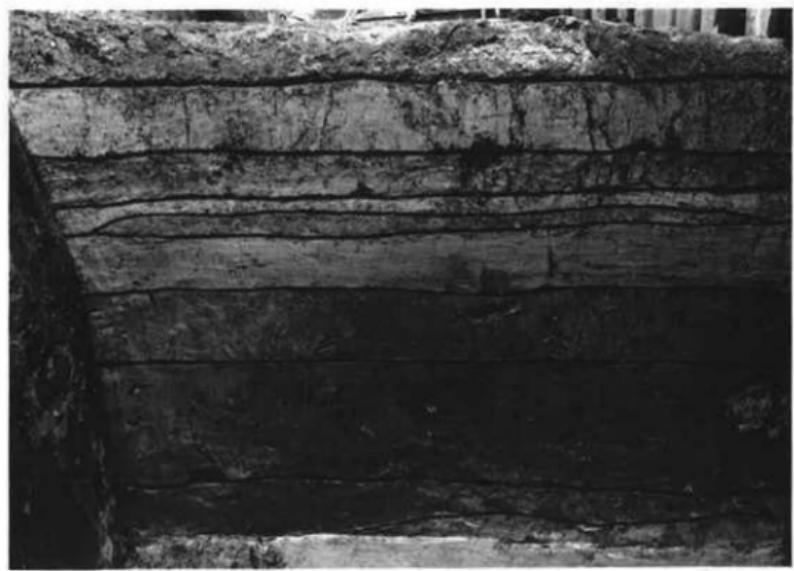
1. 4B 地區 骨出土狀況



2. 4C 地區 動物遺體出土狀況



1. 第5次調査地近景



2. 5B地区 東壁断面



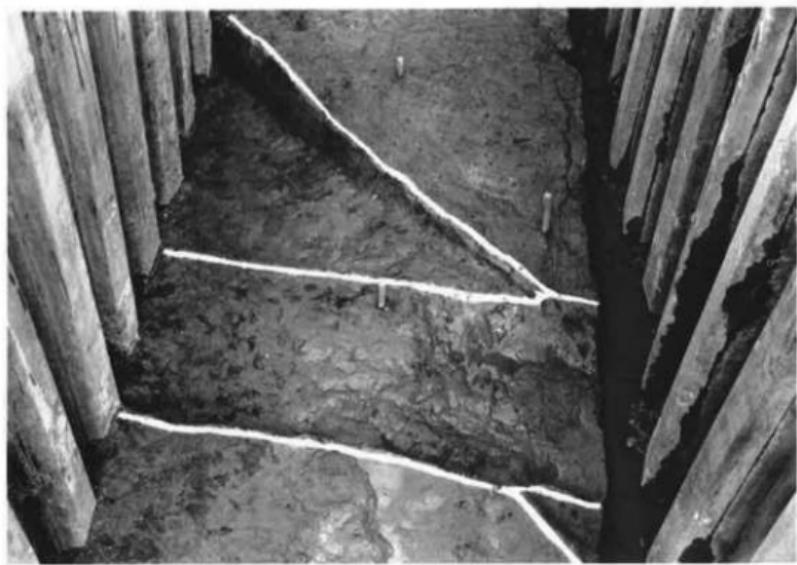
1. 5D 地區 東壁斷面



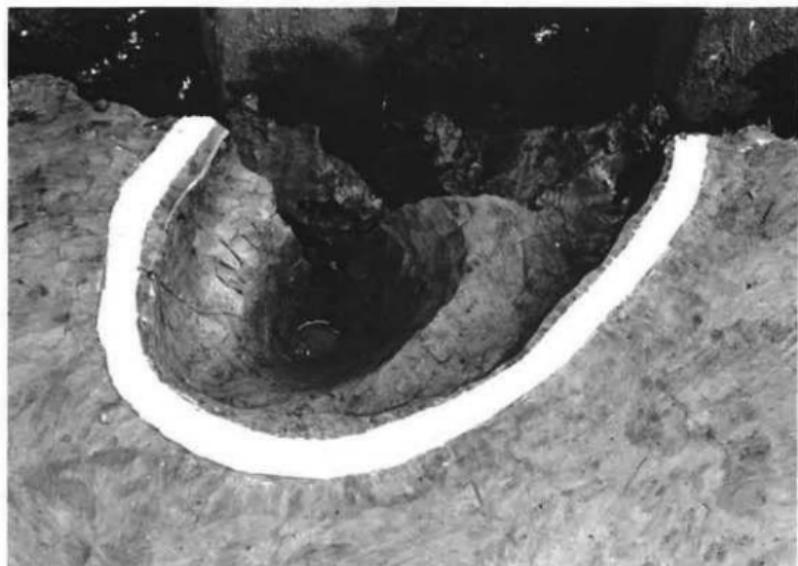
2. 5H 地區 東壁斷面



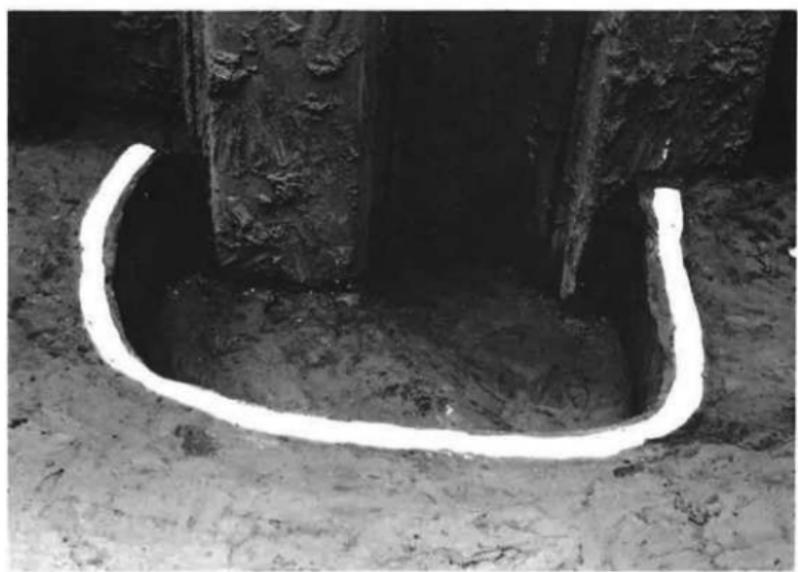
1. 溝4 東から



2. 溝4・6



1. ピット17



2. ピット18



1. 桩列 3



2. 桩列 3



1. 杖群4 西から



2. 杖群4 東から



1. 杭列5 東から



2. 杭列5 東から



1. 杖群 6 西から



2. 杖群 6 西から

図版十八 5A～H地区



1. 5A～H地区 西から



2. 5A～H地区 西から



1. 5 A 地区 狹簾出土状况



2. 5 B 地区 狹簾出土状况



1. 5C 地區 腕輪出土狀況



2. 5C 地區 弥牛土器出土狀況



1. 第6次調査地近景



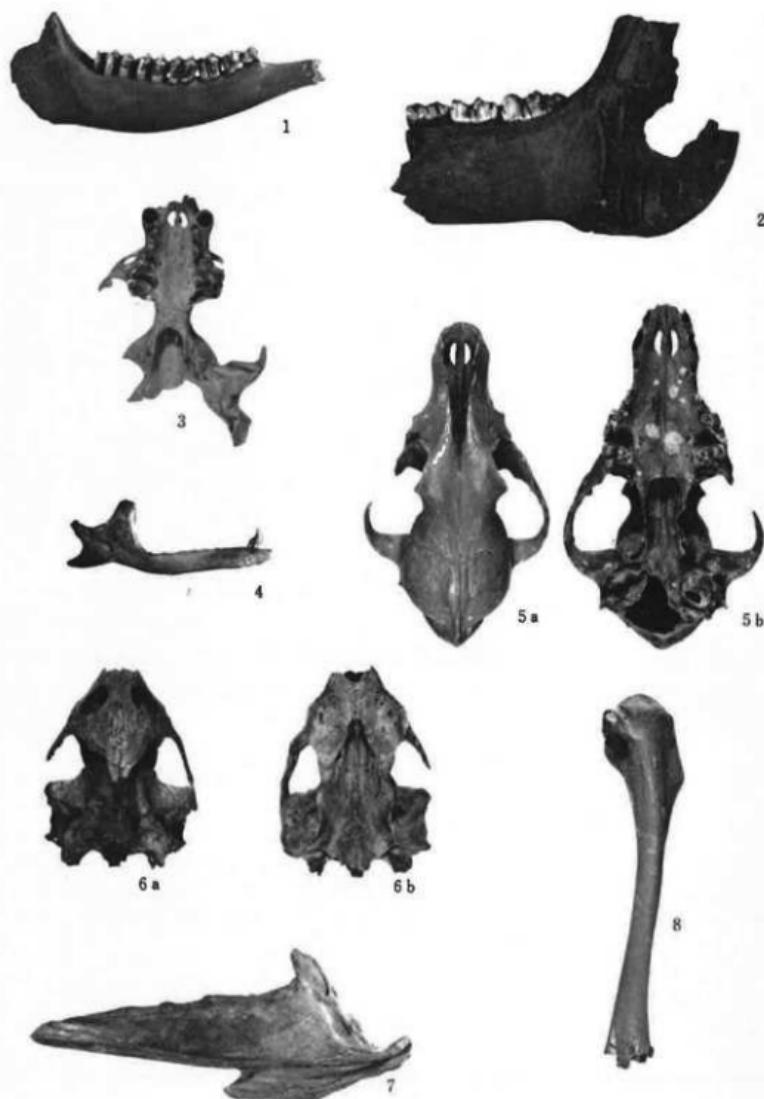
2. 6B地区 西壁断面



1. 6 A 地区 東から



2. 6 B 地区 東から



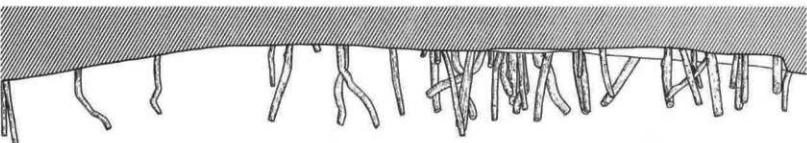
1:シカ 右下頸骨。 2:イノシシ 左下頸骨。 3:スッポン 頭蓋下面。 4:コウベ
モグラ 左下頸骨。 5:イヌ 頭蓋 a; 上面, b; 下面。 6:スッポン 頭蓋 a; 上
面, b; 下面。 7:サワラ 左関節骨。 8:トリ類 右上腕骨

鬼虎川遺跡調査概要 I

1980年11月1日

発行 東大阪市遺跡保護調査会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所



第22図 51・J地区杭群6、落ち込み1・2

O.P. + 1 m